光と影のフレール

はなもも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
光と影のフレール

【Ｎコード】
Ｎ７２５５Ｆ

【作者名】
はなもも

【あらすじ】
あたしがこの国の救世主！？突然異世界に伝説の女性として召還された鈴の恋愛ファンタジー

第1章（前書き）

ようやく書き始めた第3作目の作品です。
最後までおつきあいいただけると、うれしいです。

第1章

「ねつ、お願い！　今回だけでいいから協力して欲しいの」

「そう言われても……、もう2年以上やってませんし、急にやったところで足手まといになるだけですよ」

「2年のブランクなんて、あなたならちょっと練習したら感なんてすぐ戻るわよ。なんたって、高校インターハイ優勝者なんだし」

鈴は困ったように、頭を掻いた。

広池鈴（ひろいけすず）大学2回生、２０歳。

剣道団体戦の中堅で出る予定だった選手が階段から落ち、腕を骨折してしまったらしく、現在ひとつ上の先輩から1週間後にある剣道の練習試合に出て欲しいと、お願いされている所だ。

「私に頼まなくても、他にも部員はいるじゃないですか」

鈴が通っている北斗大学の剣道部は県内でも強豪校で有名だ。

その為、選手層は必然的に厚くなる。

わざわざ鈴に練習試合に出て欲しいと、お願いにやってくる必要はないはずだ。

大学入学当初から、高校インターハイ優勝という経歴を何処で調べたのか、何度も入部の勧誘をされている。

もちろん一度もＯＫしたことはない。

「もちろん、うちの部は他の大学より優秀な選手が集まっているわ。だけど、相手は宿敵、南都大学よ！　たとえ練習試合とは言え、負ける訳にはいかないわ！　その為にはあなたの力が必要なの」

「何度も言ってますが、もう剣道をするつもりはないんです」

そう断りを言って歩き出した鈴の横を、平行するように先輩も歩き始める。

「あなた程の実力の持ち主が、このまま剣道をやめてしまうなんて、もったいないわ。剣道界の大きな損失よ！」

まったく、しつこいな。

何度断っても勧誘に来る。

剣道界の損失なんて、あたしの知ったこっちゃない。

力強くしゃべる先輩を横目に、鈴は少し歩く速度を速めた。

「申し訳ないですが、他をあたってください」

そう言うと、先輩は足を止めたが、鈴はかまわずそのまま歩いた。

「私はあきらめないわよ」

後ろから聞こえてくる声に答える事なく、鈴は次の授業がある第３

校舎に入った。

「なに、また勧誘されてたの？」

廊下を歩いていると、そう声をかけてきたのは同じ学部の同級生、南沢祥子だ。

「よっぽど、アンタが欲しいのね。１回ぐらい出てやれば」

「ヤダ！　あたしの青春はすべて剣道漬けだったのよ。大学に入ったら、絶対にキャンパスライフを謳歌するって決めてたんだから」

そうよ、祖父が剣道教室をしていたことから、物心ついたころにはもう竹刀を振っていたのよ。

そのせいで、あたしの人生は剣道一色だったんだから。

せっかく親元を離れたんだから、もう剣道なんてまっぴら。

「あんな汗臭い事してたら、ステキな恋だって逃げちゃうわよ」

「ステキな恋ねぇ。剣道をしてなくてもステキな恋が出来てるとは思えないけど？」

ぐっ！

それを言われると、返す言葉がない。

大学に入ったら、かっこよくてやさしい彼氏を作るんだって思っていたのに、告白すればことごとく振られる日々……。

現在、１０連敗を更新まっしぐらの彼氏いない暦２０年。

「あたしの良さがわかんないなんて、みんな見る目なさすぎなのよ！」

「そう言うのを何ていうか知ってる？　負け惜しみっていうのよ。しかも、あんたの好きになる相手って、大学で人気のある人ばっかりじゃない。鼻っから相手にされる訳ないでしょ」

いいじゃない、ちょっとぐらい夢見たって。

そんな言い合いをしながら、校舎の2階へと最後の階段を上りかけた時、グラッと目の前が揺れた。

一瞬、目眩がしたのかと思ったが、次の瞬間、下から突き上げるような揺れがやってきた。

地震！？

突然の地震に周りからは悲鳴が聞こえてきている。

激しい横揺れに、階段の手すりに捕まろうとしたがその手は空を舞い、あたしの体は後ろに傾いた。

やばい、このままだと転げ落ちる。

ああ、きっと痛いだろうな。

そんな冷静な部分が頭をよぎり、受け身の体制をとろうと階段の踊

り場を見た時、あたしは目を疑った。

そこはいつのも踊り場ではなく、真っ暗なブラックホールが広がっていたからだ。

なっ、なによ、これ。

どうなってんのよ！

しかし、つかまるものが何もないまま、なす術無くあたしの体は宙に浮き、体が引っ張られるようにブラックホールへと落ちていった。

えぇ！　あたし一体どうなっちゃうのぉ。

第2章

痛ったぁ。

落ちる時に受け身をとったつもりだったけど、思いっきり右腕を打ったようで、起き上がろうと右腕を動かしたら、かなりの痛みが腕に走った。

それでもどうにか起き上がると、周りに広がる景色を見て絶句した。

ここ、何処よ！

あたしが居たのは大学の校舎内だったはず……。

なのに、何処を見ても木しか見えず、明らかに森の中に放り出されたようだった。

なっ、なんで森の中……？

混乱する頭の中で、必死に冷静な部分を取り戻そうとした。

落ち着け、鈴。

そう、まずは落ち着こう。

あたしは大学の校舎で階段を上っていた。

だけど地震がきて、あたしは階段から落ちたんだ。

そして……、……あぁ！

落ちる時に見たあのブラックホール！

もしかして、そのせいでこんな森の中に飛ばされたとか。

まさか……ね……。

そんなファンタジー小説じゃあるまいし、そんな事が現実にある訳……。

そう思いながらも、自分のいる場所を改めて確認すると、やはり大学の校舎ではなく森の中だった。

と、とにかく、携帯で誰かに連絡しよう。

鞄の中から携帯を取り出したが、森の中で携帯が通じる訳もなく、無情にも通話可能な三本線は消え、圏外が表示されている。

なんで電波が届いてないのよっ！

まったく、信じらんない。

なんの為に毎月携帯代払ってると思ってんの！

こんな緊急時に通じなかったら、意味ないじゃん。

どうしよう、誰にも連絡出来ないってことは、あたしこのまま遭難なんてことになっちゃうんじゃ。

まだ明るいけど、このまま日が暮れてしまったら……。

見つかった時には遺体だったなんてことになるんだろうか……。

あたしはブルブルと、顔を横に振った。

そんなのイヤ！

せっかく大学に入って、キャンパスライフを謳歌するはずったのに、こんな所で死んでたまるか。

とにかく、日が落ちる前に街まで行かなきゃ。

いろいろと頭は混乱してるけど、こうと決めたらすぐ行動するタイプのあたしは、さっそく森の中を歩き始めた。

どこをどう歩けばいいのかわからないけど、とにかく自分の感を頼りにひたすら歩いたが、自然はそんなに甘くはなかった。

どんなに歩いても景色は変わらず、日が落ちていくばかり。

感だけを頼りに歩いているせいか、何処をどう歩いているのかもさっぱりわからない。

もうダメ、歩けない。

あたしはその場に座り込み、近くの木によりかかった。

まったく、なんであたしがこんな目にあわなきゃいけないのよ。

歩きっぱなしで疲れてきた体に、夕日が目に染みる。

あたし、このまま誰にも気づかれる事なく、死んじゃうんだろうか。

あぁ、こんなことならもっとおいしい物沢山食べて、コンパももっと行っておけば良かったな。

茜色に染まっていく空を見上げると、お腹が鳴った。

そういや、昼食も食べてなかったんだった。

お腹空いたぁー。

そう思った時、何処からともなくいい匂いがしてきた。

気のせいかとも思ったが、もしかして近くに民家があるのかもしれない。

そう思ったら体の疲れも吹っ飛び、匂いを頼りに歩き出した。

そして辿り着いた所は、少しひらけた所に建っている一軒家だった。

煙突から煙が出ているってことは、人がいるってことだ。

ようやく民家を見付けた喜びと、ホッとした気持ちがこみ上げ、あたしはその場に座り込んだ。

良かったぁ。

これで遭難しなくてすむ。

その時、家の中から男の子が出てきて、家の脇に置いてある薪をいくつか手に取り、家の中へと戻ろうとしていた。

「あ、あのっ」

男の子に声をかけると、その場に立ち止まりこちらを振り返った。

しかし、男の子は驚いたように立ちつくしたと思ったら、薪をその場に落とし家の中へと走って戻っていった。

しかも、しっかり扉を閉めて。

そんなに驚かなくても……。

あたしは仕方なく、立ち上がり民家の扉へと向かった。

民家の扉の前で立ち止まり、扉をノックしようとしたその時、突然扉が開いた。

そして、開いた扉の内側に立っていたのは、さっきの男の子ではなく老人だった。

真っ白な長い髪とヒゲ、手には身長より少し低い杖を持っている。

その印象はまるで仙人のようだった。

「突然で申し訳ないのですが、電話をお借り出来ないでしょうか？
どうも森の中で迷ってしまったようで」

変な人に思われないよう、おもいっきり笑顔で老人に話しかけたが、老人はあたしの顔をジッと見たまま、答えようとしない。

森の中を歩き回ってたから、きっと顔に何かついているのかもしれない。

「あのっ、あたしの顔になにか付いてますか？」

「嬢ちゃん、何処から来なすった？」

何処からと言われても……。

大学の校舎からいきなりこの森に来たんです、なんて言っても信用してもらえないだろうな。

あたし自身今の状況がよくわかってないんだから。

「まぁ、よい。中に入りなされ」

説明する手間が省けホッとしながら、老人の後に続いて家の中へと入った。

第3章

電話を借りて、早く家に帰ろう。

「あの、電話をお借りしたいんですが」

「そんなものはここには無いのぉ」

「へっ？　電話ないんですか？」

「無い」

無いって……。

よく見ると、テーブルの上にあるローソクが明りを灯している。

天井に目をやると電気が無い。

もしかして、ここには電気が来ていないの？

老後に昔ながらの生活を楽む、そうゆう趣向の人なんだろうか。

「それじゃ、ここから街までの道を教えていただけませんか」

電話が無い以上、自力で帰るしかない。

もっとも、ここに民家があるのだから、街まで自力で行く事はそれほど難しくないだろうと考えていたが、それは甘い考えだと思い知らされた。

「嬢ちゃんは何処から来なすった？」

老人はあたしの問いには答えずに、玄関先であたしにした質問をもう一度繰り返し、一切の誤摩化しがきかないかのように、こちらをジッと見て目線を外そうとしない。

まるで、全てを見透かされているようだった。

言ってもどうせ信じてもらえない、そう思ったが話を逸らして先に進むことが出来なさそうな雰囲気に、仕方なく笑われるのを覚悟で、あたしは自分の現状を老人に話した。

しかし、意外な事に老人は笑う事無く、最後まであたしの話を聞いていた。

「それで、嬢ちゃんはその大学とやから、この森へ突然やってきたというわけじゃな」

ふむ、と言ったまま老人は何かを考えるように黙り込んでしまった。

「嬢ちゃんがいた場所へ帰るには、ちと難しいかもしれんな」

「難しいって、どうゆうことですか」

まさか、そんなことを言われるとは思っていなかった。

民家が見つかれば、街にさえでれば、すぐに戻れると思っていたのに。

「嬢ちゃんは呼ばれたんじゃよ」
「呼ばれたって、どこに？」
「この国に」
「この国って……」
なんだか話の意図がよくわからない。
「ここは日本じゃないんですか？」
「日本という国は知らんが、少なくとも違う事は確かじゃ」
日本を知らないって……、ますます意味が分からない。
「それに、嬢ちゃんのその黒い瞳と髪を持つ者は、この国にはほとんどおらんからのぉ」
「ほとんどいないって、どうゆうことですか？　ここは何処なんですか？」
「ここはレガン国のプエヌ村じゃ」
レガン国？　プエヌ村？
あたしは必死で世界地図を頭に思い浮かべたが、聞いた事のない名前だった。
もっとも、知っているのは主要国ぐらいで、世界中の国名を知って

いる訳ではない。

「それは……、世界地図でいうとどの辺りなんでしょうか？」

老人は近くにあった棚から、巻かれた紙を取り出し、広げた。

「ここじゃよ」

そして指差した所は、あたしのまったく知らない場所だった。

いや、それどころかその紙に書かれている地図は、いままであたしが見た事もない形をしている。

「あのっ、これが世界地図……、ですか？」

「そうじゃ」

どうゆうこと？

世界地図って、いつこんな形に変わったの？

見た事もない地図の上を指で指されたって、まったく自分のいる場所が確認できない。

混乱しているあたしに、老人は追い打ちをかけるような一言を言った。

「わしが思うに、嬢ちゃんはこの世界とはまったく関係のない所から、ここへ来たようじゃな」

そうか、いま居るこの世界とはまったく関係のない所から来たから、地図が見た事ないんだ。

なぁーんだ……って、そんなのんきな事を言っている場合じゃない！

「じゃ、あたしはどうやって帰ればいいんですか！」

あくまでものんきに話す老人に、あたしは食ってかかった。

「だから、言ったじゃろ。帰るのは難しいかもしれんと」

そんなぁー。

あたしはその場に座り込んだ。

元の世界に帰れないのなら、あたしはこれからどうしたらいいのよぉ。

半分泣きそうになりながら、ガックリとうなだれた。

「まぁ、そう悲観するでない。嬢ちゃんをこの国に呼び出した張本人が見つかれば、帰る事は可能じゃろう」

「あたしをこの国に呼んだ張本人って、誰ですか！」

「それは、そのうちわかるじゃろうて。嬢ちゃんを呼んだのはいいが、行方がわからないのなら、今頃必死になって探しておるわ」

一体誰よ！

あたしに許可もなく勝手にこんな所に呼んだのは！
絶対文句言ってやる！
「まぁ、それまで、むさ苦しいところじゃが、ここにおればよい」
老人に言われてようやく気づいた。
そうだ、あたしこの国で寝床がないんだった。
「いいんですか？」
申し訳なさそうにあたしが言うと、老人はふぉふぉと笑った。
「これも何かの縁じゃ、迎えが来るまでゆっくりするがよい」
あたしは、老人のありがたい申し出を快く受けた。
だって、こんな知らない所で放り出されたら、きっとあたしを呼び出した張本人を見付けるより先に、野たれ死んでしまうわ。
自分の置かれた状況と、これからの事が決まったことで、ホッとしたのか急にお腹がぐぅーと鳴った。
老人はあたしのお腹の音を聞くと、またふぉふぉと笑い部屋の扉へと目を向けた。
あたしもつられて目を向けると、開いた扉の隅から子供がふたり、顔だけ出して覗いていた。

そのうちのひとりはさっきあたしを見て、慌てて家に駆け込んだ子だった。

「入って良いぞ」

老人の言葉に、１０歳くらいの子がふたり、恐る恐る部屋の中へと入ってきた。

「この子達は、事情があってわしが預かっておる双子の兄妹じゃ」

兄をクルト、妹をソニアと言った。

ふたりとも金髪に瞳は緑と、あきらかに日本人ではない顔立ちをしている。

「今日からしばらく一緒に生活する事になった……、そういえばまだ名前を聞いておらんかったの」

「鈴、広池鈴です」

「鈴の分の夕飯も用意してあげておくれ」

老人は鈴の名前を聞くと、クルトとソニアに向かって言った。

「はい、老師様」

ふたりはハキハキとした返事をして、部屋を出て行った。

「では嬢ちゃん、夕食としようかの」

老師が部屋を出て行く後を、あたしはありがたい思いでついて行った。

第４章

朝日が部屋に降り注ぎ、眩しさで目が覚めた。

いつもなら、布団の中でくすぶっているあたしだが、ガバッと布団をめくり上げるように上半身を起こす。

そして、ゆっくりと部屋を見渡した後、深いため息が出た。

やっぱり、夢じゃなかったんだ……。

もしかして、昨日のことは全て夢で、起きた時にはいつもの自分の部屋にいるんじゃないか、そんな期待があったのだが、期待は見事に外れた。

老師様の家はそれほど広くはなく、あたしはクルトとソニアが使っている部屋を一緒に使わせてもらう事になったのだが、部屋にベッドは２つしかなく、体の大きさからあたしがひとつ、そしてもうひとつはクルトとソニアが共同で使う事になった。

そのもうひとつのベッドを見ると、すでに人の気配はなくもぬけの殻だ。

あたしはベッドから降り、食堂へと向かうと、すでにクルトとソニアが朝食の用意をしていた。

「昨日はよく眠れたかの」

後ろから声を掛けられ振り向くと、老師様が立っていた。

「おはようございます。おかげさまでよく眠れました」

「それは良かった」

老師様はあたしの横を通って、食堂のテーブルにつき、それにならいあたしもテーブルにつくと、ソニアが山菜の入ったスープを運んできてくれた。

テーブルの上には、すでに丸いナンのようなものが置いてある。

昨日の夕食も思ったけど、かなり質素な食事だ。

ソニアが全員のスープを並べると椅子に座り、スープをよそっていたクルトも席に着き、みんなで朝食を食べた。

「老師様、今日は何をすればいいの？」

朝食を早々に食べ終わったクルトが、老師様に話しかけた。

「そうじゃの。今日は水汲みと森で山菜採りでもしようかの」

朝食が終ると、クルトとソニアとあたしの3人で、山菜採りに行った。

しかし、山菜採りなどしたことないあたしにとっては、すべて同じ草にしか見えない。

そう思いながらも、クルトに教えてもらった草を探し摘んでいたのだが、しばらくしてからクルトがあたしの近くにやってきて、山菜

を入れていた籠を覗く。

「鈴、これ全部違うよ」

驚いて自分の籠の中を手にとって見たが、どう違うのかがわからない。

「食べれるのは葉がギザギザのほう。鈴が摘んだ葉は丸いだろ。これは毒を持っているから食べたら死んじゃうよ」

クルトに毒を持っているといわれ、慌てて摘んだ葉を籠から捨てた。

だって、怖いじゃない。

毒があって、食べたら死んじゃうなんて。

そんなあたしを見て、クルトが笑った。

「そんなに慌てて捨てなくても、持ってるだけじゃ死なないよ。鈴って大人なのにそんな事も知らないんだね」

だって、仕方ないじゃん。

あたしのいた世界で、山菜に詳しい人の方が稀だったんだから。

しかし、クルトの籠の中を見るとあたしに教えた草だけでなく、いろんな種類の山菜を籠一杯に摘んでいた。

山菜採りに来る時は、保護者のような気持ちで来ていたのに、１０歳の子供にそんなことを言われ、あたしはすっかり気を落としてし

まった。

そして山菜採りを終えると、昼食をはさんで水汲みに行った時にも、思い知らされる。

「ねぇ、水汲みっていつもやってるの？」

そう聞くとソニアが答えた。

「2日に1回くらいかな。老師様の家の近くには井戸が無いから、いつも川まで汲みにいかないといけないの」

老師様の家から川までは約2キロほどだったけど、蛇口をひねればすぐ水が出る生活に慣れていたあたしにとって、桶2つに水を汲んで家まで帰るのはかなりの重労働だった。

しかし、クルトとソニアは何でもないかのように、水汲みをして家まで運んでいる。

あたしのしていた生活がいかに労力を使わずに、楽な生活をしているかを思い知らされる。

水道って偉大だ。

水汲みを往復4回し終った頃にはすっかり体力を消耗し、へばってしまった。

あたしって、こんなに体力なかったっけ。

剣道をやっていたころは走り込みや筋力作りをしていたから体力に

は自身があったのに、大学に入学してからサボっていたツケが今きたって感じだ。

やっぱり、サボらず走り込みぐらいやっておけば良かった。

しかし、そんなことを考えても後の祭りで、クルトとソニアはそのあとすぐに夕食を作り始め、夕食が出来上がる頃にはすっかり大人としての威厳はなくなっていた。

第5章

次の日、昨日採った山菜を街まで売りにいくというので、あたしはクルトとソニアと一緒に街まで行くとこになった。

「街へ行けば嬢ちゃんの髪は目立つからの、これを着ていきなされ」

渡されたのはフード付きのマントだ。

「クルト、ソニア。頼んだぞ」

「はい、老師様。私がいるから大丈夫だよ」

しっかり者のソニアは昨日の仕事の一件があってか、すっかりあたしの保護者きどりだ。

あたしはフード付きマントを羽織り、街へと歩き出した。

街まではここから１０キロほど歩いた所にあるらしい。

「なんで、鈴は髪と目の色が黒いの？」

左手で手を繋いでいたソニア言った。

なんでって、言われてもなぁ。

日本じゃそれが当たり前だったし、考えたこともなかった。

「そんなに黒い色は珍しい？」

「うん。街でも一度も見た事無いよ」

「鈴はこの国の人じゃないの？」

少し前を歩いていたクルトが質問した。

「この国の人間じゃないことは確かみたいだね」

「じゃ、何処から来たの？」

どこからと言われても、説明のしようがないんだけど。

「老師様が持っている地図で見たらわかる？」

クルトが言っているのは、最初に来た時に見せてもらった地図のことだろうか。

「わからないと思う。あたしが住んでいた所はここからとっても遠い所からだよ。……たぶん」

「えー、そうなの。なぁーんだ」

ソニアが残念そうに言った。

その時ふと不思議に思った。

クルトとソニアはまだ学校に行っていなきゃいけない年齢じゃ……。

「ね、クルトとソニアは学校に行かなくていいの？」

「学校ってなに？」

ふたりの思っていなかった反応にビックリした。

もしかして、この国には学校がないの。

「文字の読み書きや、数の数え方を教えてくれる所だよ」

あたしは出来るだけわかりやすく聞いてみた。

「それなら、あたし達は老師様に教えてもらってるよ」

「他の子達はどうしているの？」

「裕福な子達は、教えてくれる人を雇っているみたいだけど、そうじゃなければそのままだよ」

「そのままって、文字も読めないままってこと？」

「そうだよ。僕達はたまたま老師様の所でお世話になっているから、いろんなことを教えてもらっているけど、普通に街で暮らしていたら、たぶん何も知らなかったと思う」

学校がなく、読み書きを教えてもらう事がないというのがあたしには信じられなかった。

だって、日本じゃ本人の意思に関係なく、６歳になれば学校に行くのがあたりまえだったから。

よくテレビでは学校に行きたくても行けない外国の子供達を見たことがあるけど、実際自分が直接こんな話を聞くとは思っていなかった。

勉強って面倒くさくって楽しいなんて思った事はないけど、それでも学ぶ事ってとっても大切だとあたしは思う。

読み書きや数が数えられなかったら、騙されたりしてもわからないじゃない。

そのためにはちゃんとした知識を知っているって、とても大切なことなのに、それがちゃんと出来てない国ってあまり感心しない。

まったく、なんて国なんだろう。

教育の重要性をわかってない。

「あれがお城だよ」

ソニアに声を掛けられて、指差す方を見ると、小高い丘にお城が建っていた。

なんだか中世のヨーロッパに来たかのような、立派なお城だ。

「お城が見えてきたら、街はもうすぐだよ」

周りをよく見ると、すっかり森を抜け、道の両脇には作物が立派に実っていた。

それだけを見ればとても豊かな国に見えたけど、街に入る為の門を

くぐると、あたしの予想とはまったく違った。
街にはあきらかに浮浪者のような人が、沢山道に座り込んでいたりしている。
閉まっているお店も多く、開いていても、店頭に並んでいる商品は非常に少ない。
「お店に並んでいる商品って、少ないんだね」
あたしが素朴な疑問を口にすると、クルトが答えた。
「ずっとこんな感じだよ」
「ずっと？」
「うん。今の王様に変わってからどんどん税金が高くなって、税金を払えない人は土地とか作物とかを没収されちゃうんだ」
「じゃ、ここに来るまでの間にあった作物は？」
「あれは税金で土地をとられた人達の土地で、全部お城に献上する分だよ。土地をとられた人達は収入が無くなっちゃうから、しかたなく低い賃金でお城に雇われてるって、老師様が教えてくれた」
税金といい教育といい、いったいこの国の王様はなにやってんのよ！
国民の首を絞めるようなことばかりして、独裁政権もいいとこだわ。
クルトとソニアは慣れたように店のおばさんと交渉し、持ってきた

山菜を現金に換えた。

そして現金手にすると、そのお金で必要な物を買った。

「これで全部だよ。帰ろ」

あたし達は来た道を帰ろうと歩きかけたとき、前の方から大きな声が聞こえてきた。

「泥棒！」

よく見てみると少年が走っていて、その後ろを二人の男が追いかけているが、泥棒と呼ばれた少年の足が速いのか、追いつけないどころか、どんどん離されているように見える。

それを見たあたしは、店のそばに置いてあった棒らしき物を手に取ると男の前へと進み出た。

少年は後ろを振り向き、追っての様子を確認している為か、あたしが真正面に立っている事に気づかない。

体の正面でしっかりと棒を握りしめ、タイミングを見計らう。

少年が近づいて来た時、足を一歩前に踏み出し、胴におもいっきり打ち込んだ。

不意をつかれた少年は、体をくの字に曲げ、咳き込みながらその場にうずくまる。

あたしはその時少年が落とした、袋を手に取った。

「なにしやがる！」

うずくまっていた少年は、あたしの方を睨んだ。

その顔を良く見ると、かなり若い。

15歳ぐらいかな。

こんな子供が窃盗をしなきゃいけないぐらい、この国は貧しいんだろうか。

「あんたね、人の物を盗むのはいけない事だって教わらなかったの？」

「くそガキ、待ちやがれ！」

後ろから追いかけてくる男達の言葉に、あたしを睨んでいた少年は立ち上がりながらあたしに体当たりし、そのまま走り去っていった。

数十秒後、男を追いかけていた2人組があたしの前でゼィゼィと息を切らして立ち止まった。

「てめぇ、あいつの仲間か！」

おいおい、なんでそうなるのよ。

あたしは盗られた物を取り返してやったんじゃない。

そう思い、あたしは手に持っていた袋をふたりの男に見せてやろう

したが、手にしていた袋がいつの間にか無くなっている。

あーあっ！

ぶつかって立ち去っていった時に、盗られたんだ！

あのガキ！

「盗った物を返しな」

男はそう言ってあたしに凄んだ。

「あたしは仲間なんかじゃない」

「嘘をつくな！　おれは見たんだ。お前が袋をあいつから取っていたのを」

それを見てたなら、なぜあたしが胴に打ち込んだ所をみてないのよ！

あんた達の目は節穴か！

「それに、なんだお前のその髪」

すると、横に隠れるようにしていたソニアがあたしの袖を引っ張った。

「鈴、フードが取れてる」

手を頭にやると、被っていたフードがすっかり取れていた。

ヤバイ！

「どこのモンだぁ」

もしかして、これってかなりマズイ状況なんじゃ……。

男達はジリジリとあたし達に近寄ってきた。

よく見ると、周りには野次馬が集まり始めてる。

どうしよう。

迷った末、逃げるしかないと考えたが、クルトとソニアを連れていては、普通に逃げても逃げ切れるかどうかわからない。

しかたなく、あたしは持っていた棒を両手で握りしめ、男の喉元めがけて突いた後、すぐに棒を引き、もうひとりの男に胴を打ち込む。

男達は咳き込みながらその場に座り込み、あたしは即座に棒を捨て、後ろに隠れていたクルトとソニアの手を引き、全速力で逃げた。

城門を抜け、しばらく走った所で後ろを振り返り、追っ手がいない事を確認した後止まったが、久しぶりに全速力で走った為か、なかなか息が整わない。

「大丈夫？」

息が落ち着いてきた頃、クルトとソニアに話しかけた。

「鈴って強いんだね」

なぜかクルトがとてもキラキラした目でこちらを見ている。

「鈴、僕に剣の使い方を教えてよ」

剣って……。

あれはそんなモンじゃないんだけどな。

「クルトにはまだ早いってお父さんが言ってたじゃない」

興奮気味に話すクルトになんて話そうか考えていると、ソニアが言った。

「ぼくはもう10歳なんだ。剣の練習をしたっておかしくない年なんだからな」

「クルトには無理よ」

「無理じゃないよ！」

気がつけばいつのまにか兄妹喧嘩が始まっている。

こんな所で喧嘩している場合じゃないんだけど……。

あたしは仕方なくふたりをなだめ、ようやく老師様の家に着いたのだった。

第6章

次の日、薪割りをしているとクルトが近づいてきた。

「ねぇ鈴、剣の使い方教えてよ。僕、強くなりたいんだ」

あたしは薪割りの手を休めた。

「あれは剣とはまたちょっと違うんだよ」

剣道はあくまでもスポーツであり、実践の剣を使うのとは訳が違う。

ただ、昨日から何度説明してもクルトは違いを理解してくれない。

「クルト、まだ言ってるの」

薪を持ったソニアがあたし達に近づいてきた。

「ソニアには関係ないだろ！」

「お父さんの許可がなかったらダメだって、昨日の言ったじゃない」

あたしは小さく溜め息を吐いた。

昨日からずっとふたりのこの状態が続いているのだ。

剣を習いたいというクルト、お父さんの許可がないからダメだというソニア。

仕方なくあたしはふたりの仲裁に入ろうとしたその時、人の声が聞こえ振り返ると、４頭の馬に乗った男達がこちらに向かって来ている。

クルトとソニアも気づいて、喧嘩を止め男達の方を振り返る。

男達はあたし達の前まで来ると馬の歩みを止め、馬から降りた。

「お前か、昨日街で騒ぎを起こした黒髪の娘は」

その言葉にあたしは嫌な予感がした。

昨日の騒ぎを聞きつけて、あたしを捕まえに来たのかもしれない。

「何の用？」

あたしはクルトとソニアを背後に隠しながら、男達を睨んだ。

「今から一緒に城まで来てもらおうか」

「なんであたしが城に行かなきゃならないのよ」

あたしは何にも悪い事していないのに、なんで城に連れて行かなきゃいけないのよ。

冗談じゃないわ。

「素直に来てもらいないなら、無理にでも来てもらうしかないな」

徐々に近づいてくる男達を警戒しながら、あたしは持っていた斧を

しっかりと握った。

あぁ、でも昨日の棒と違って斧だと危ないよな、どうしよう。

いくらなんでも、殺人犯にはなりたくない。

「やめろ！」

どう対応しようか迷っていると、男達がやって来た方向からひとりの青年が馬に乗ってやって来た。

長身の青年は近くまでやって来ると馬を降り、あたし達に近づいて来ていた男を睨んだ。

「手荒なことはするなと言ったはずだぞ」

「申し訳ありません」

睨まれた男は頭を下げ、後ろに下がった。

「私は城に仕えている者で、ルカ・ルーシドと申します。先程は私の部下が失礼を致しました。あなた様に城に来ていただきたくて気がせってしまったようです」

ルカ・ルーシドと名乗った男はあたし達に向かって丁寧に頭を下げた。

部下って……、２０歳前半に見えるルカの方が絶対若いと思うけど。

「改めて私どもと一緒に城に来ていただけませんか」

さっきの男達とは違って、丁寧な言葉で言われあたしは戸惑った。
一体この人たちは何をしにきたのだろう。
絶対昨日の件で警察とかに連れて行かれるのかと思ったのだけど、ルカの様子を見るとそうでもないらしい。
でなきゃ、こんなに丁寧にお願いするわけないよね。
「ずいぶん騒がしいのう」
どうすればいいか対応に迷っていると、家から老師様が出て来た。
「なんじゃ、おぬしらは」
老師様の言葉にルカはあたしにしたように、丁寧に挨拶をし、あたしを城に連れて行きたい事を告げた。
「ふむ。嬢ちゃんはどうするんじゃ」
どうするって言われても……、どうしよう。
「迷う気持ちもわからんではないが、行く事で嬢ちゃんのここへ来た意味がわかるかもしれんぞい」
本当にこの人達と一緒に行ったら、あたしがここに来た理由がわかるんだろうか。
「せっかく来た迎えじゃ、無下に断る事もなかろうて。何事も前に

進んでみんことには、結果は得られんでのぉ」

そ、そうだよね。

老師様が言ったように、一緒に行くことであたしが元の世界に戻る手がかりがわかるかもしれないなら、行ってみる価値はあるかもしれない。

「わかりました。一緒に行きます」

あたしは一緒に行く事を決めた事を伝えると、右の袖を軽く下に引っ張られた。

「鈴、行っちゃうの？」

短い期間だったけど、すっかり懐いたクルトが寂しそうに言った。

「大丈夫だよ。すぐに戻ってくるから」

あたしは自分が元の世界に戻る方法を確認したら、また戻ってくるつもりだった。

だけど、あたしはそう簡単にはいかないことは、まだこの時は知らなかった。

第7章

あたしはルカの馬に乗せてもらい、城へと向かった。

歩くのとは違って、馬だとあっとゆう間に街まで着いた。

街の中は相変わらず浮浪者が多く、店が開いていても活気がない。

これでこの国はちゃんと成り立っているのだろうか。

人ごとながら、なんだかとても心配になってしまう。

城門をすぎるとルカは一緒にいた男達と別れ、城には向かわず横道に逸れた。

「どこへ行くの？」

あたしは不思議に思い、ルカに訪ねた。

「城に行く前に会っていただきたい方がおりますので」

しばらく馬を走らせていると、一軒の家にたどり着いた。

馬を降り、ルカに続いて家の中に入った。

家の中に入ると怪しげで、なんだかよくわからない物が所狭しと棚に並んでいる。

なんだか魔女の家にでも来た気分。

「お婆、お連れしたぞ」

ルカが声をかけると、家の奥から老婆が出て来た。

「遅かったの、どこで見つけた？」

「チェルカの森に」

「チェルカの森か。わしとしたことが、ずいぶん遠くに飛んでしまったもんだ」

「まったく、もうろくしたもんだな」

「はん！　あの術がどれほど大変なものか知らんもんが生意気言うんじゃないよ」

老婆はルカの前を通り過ぎ、あたしの前まで来るとジッと顔を覗き込んだ。

「名は？」

「……鈴、です」

「ちぃと、華やかさのない顔だな」

はっ！？

人の顔を見ていきなり、華やかさがないなんてずいぶん失礼な！

どうせ、あたしの顔は平凡な顔立ちですよ。

「まぁ、よい。わしが呼び出したとおりの黒髪と黒い瞳を持った者だからな。贅沢は言うまい」

「ちょっと待った！　今呼び出したって言わなかった」

「なんじゃ、話しておらんのか」

あたしの言葉に、お婆は意外そうにルカに言った。

「あぁ、話している時間がなかった」

お婆は仕方なさそうな顔をし、口を開いた。

「おぬしを呼び出したのはあたしだよ」

「なんで、そんなことを！　早くあたしを元の世界に戻して！」

「戻す？　この全宇宙の時空をねじ曲げてお前を呼び出したというのに、そんなこと、このお婆でもそう何度も出来る訳ないだろ」

出来ないって……。

「あのね、勝手に呼び出しておいて戻せないなんて、なんて無責任な」

すると、お婆はあたしをキッと睨んだ。

「おぬしはちゃんと人の話を聞いておるのか。短い期間にそう何度

も時空をねじ曲げる事は出来ないと言ったんだ。戻せないとは言ってないだろうが」

「そ、それじゃ、元の世界には戻れるのね」

「だいたい、おぬしを呼んだ目的も果たしておらんのに、返せるわけなかろう」

「呼び出した目的？」

一体、あたしに何の目的があって呼び出したっていうんだろう。

「おぬしには、この国の王の花嫁になってもらう為に呼んだんじゃよ」

へぇー、そうなんだ。

そんな目的があって……。

えっー！

「どうゆうことよ、それ！」

なんであたしがこの国の王と結婚しなきゃいけないのよ。

勝手にあたしの結婚相手を決めないでほいわ！

「まったく、いちいちうるさい娘じゃな」

お婆は、うるさそうに顔をしかめた。

うるさいって、人に自分の人生勝手に決められて黙っていられるわけないじゃない。

「ルカ、あとはおぬしが説明せい。わしは薬の調合の途中だったんでな」

それだけ言うと、お婆はあたし達を残して奥の部屋へと姿を消した。

しばらくお婆が消えていった部屋を見つめた後、あたしはルカへと向き直った。

「どうゆうこと！」

いまにも掴みかかりそうな勢いで、あたしはルカに詰め寄ったが、そんなあたしをなだめ、城へ向かう道すがら説明してもらう事になった。

第8章

ルカは城の中に入る前に見てもらいたい物があると、ある1本の幹が太く背の高い木が植えられている場所に案内された。

一目見ただけで、とても長い時間この場所でいろんな歴史を見守ってきたんだろうと思えるような木だった。

「この木はキノエと言って、この国の守り木です」

「守り木？」

「はい。この木がいつからこの国にあるのか、１０００年前とも、２０００年前とも言われ、その起源は定かではありません。いつも、黄色い花を咲かせているのですが、ここ最近花が咲かなくなりました」

キノエの木を見上げると、確かに花らしきものはひとつもない。

「この木に花が咲かなくなると、必ず国に良くない事が起こると言われています」

なんだか不思議な木だな。

その時々の国のバロメーターみたい。

「我が国の伝説によると、キノエの花が咲かなくなり、国が疲弊し始めると、どこからか黒い髪と黒い瞳を持つ女性が現れ、この国を救うとあります」

ふぅん、どこの国でも伝説や言い伝えみたいなのがあるんだ。

「面白い伝説だね」

すると、ルカは真剣な眼差しであたしを見た。

「その女性があなたです」

へっ？

あたしはルカの言った言葉が理解できずに、見つめ返した。

「……あたしがその女性って、……それって、ただの伝説でしょ？」

「ただの伝説とは言い切れません。その証拠に、この近隣諸国には黒い髪と瞳を持つ者はいません。ただ我が国の王家を除いては」

「王家を除いてって、どうゆうこと？」

キノエの木から離れて、城に向かって歩き出したルカの後をあたしはついていった。

ルカの話によると、伝説の中ではキノエの花が咲かなくなった時、国の経済は傾き、疫病が流行り、多くの国民が亡くなったという。

そんな時、どこからか黒い髪と瞳を持つ女性が現れ国を救い、その後女性は王家の花嫁に迎えられ、平安の世が長く続いたらしい。

それ以来、キノエの花が咲かなくなると、必ず黒い髪と瞳を持つ女

性が現れ、国を救うと言い伝えられている。

ここまでだったら、ただの伝説で終わってしまう話なのだが、その女性が伝説の話で留まっていない理由として、王家には稀に黒い髪と瞳を持つ子供が生まれているそうだ。

「少し前からキノエの花が咲かなくなり、やはり国が徐々に疲弊し始めたのです。そして我々は黒い髪と瞳を持つ女性が現れるのを待っていたのですが、なかなか我々の前には現れてはくれませんでした」

そりゃ、伝説はあくまでも伝説であって、現実じゃないってことなんじゃないの。

「しかし、このまま待っているだけでは国の状況は悪化していく一方です。そこで我々は考えました。現れてくれないのなら、こちらから呼べばいいのではないかと」

なんとなく、話の先が読めたような気がする。

「それで、お婆に頼んで伝説の女性を呼び寄せた所、鈴様が現れたのです」

あたしは溜め息を吐いた。

国の状況が危ないって時に、伝説の女性なんてあやふやなものにどうにかしてもらうだなんて、なんて都合のいい話なんだろう。

自分達の力でどうにかしようとは、考えなかったのだろうか。

そのとばっちりを受けたあたしって……。

ルカは城の奥まで来ると、ある部屋の中へ入っていった。

あたしはルカに続いて入っていくと、そこは大広間のような場所だった。

部屋の上座の中央には王座がある。

しばらくすると、王座の前に長身の男性が姿を現した。

「アシル・ノーディン王でございます」

ルカはあたしにそう言うと、王に向かってうやうやしく頭を下げた。

この人がこの国の王。

王というからもっと歳のとった人を想像していたあたしは、アシル王を見て驚いた。

この国の王家にしか生まれないと言っていた、黒い髪と瞳だったからだ。

そして何より驚いたのは、どうみても１０代後半にしか見えない。

「その女か？」

「はい。鈴様でございます」

「俺は、お前らの言う伝説なんて信じていないぞ」

「それは承知しております」

ルカが頭を下げたまま言うと、アシルは冷たい眼差しであたしを見た。

「おい、そこの女。どこから連れてこられたのか知らんが、王の花嫁になるからと言って、いい気になるなよ、俺は認めた訳じゃないからな。だいたい、俺の花嫁にするならもう少し見栄えのいい女はいなかったのか。伝説なんぞに振り回される俺はいい迷惑だ」

あたしはその言葉にカチンときた。

「ちょっとあんた、ふざけんじゃないわよ！　勝手にあたしをこの国に呼んどいて、迷惑してるのはあたしの方よ。それをいい気になるなですって。王様だかなんだか知らないけどね、あたしは一言もあんたの花嫁になるなんて言った覚えはなわ。それどころか、そんな横柄な態度をとるような人、こっちから願い下げよ！」

そして最後に、アッカンベーをアシルに向かってしてやった。

そんなあたしの横で、ルカは青ざめた顔であたしを見ている。

そしてアシルは、今までそんな態度をとられた事がないのだろう。

目を丸くして呆気にとられ、返す言葉も出てこない様子だった。

へん！　ざまぁみろ。

しばらくして、ようやくあたしが言った言葉が自分に向けられて言

われたのだと気付いたアシルは、唇をワナワナと震えさせ、大声で怒鳴った。

「この女を死刑にしろ！」

げっ！

なによ、自分は言いたい事言っておいて、自分が言われたら死刑なんて、ちょっと酷すぎない。

しかし、言った言葉が取り消せる訳ではない。

どうしよう。

あたし、死刑にされちゃうのかな。

「アシル様！　気をお鎮めください。鈴様は伝説の女性です。死刑などとは……」

ルカはアシルの怒りを慌てて止めに入った。

そうよ、あたしは伝説の女性なのよ。

死刑なんかにしたら、あんたバチが当たるわよ。

「ならば、二度と俺の前にその顔を見せるな！」

アシルはルカの言葉に歯ぎしりをし、あたしを睨んだ後、怒鳴りつけ、部屋を勢いよく出て行った。

どうにかその場が収まったが、ルカは困ったようにあたしを見た。

「なぜあのような事を……」

だって……。

あんなこと言われたら誰だって黙っていられないわよ。

ルカは少し溜め息を吐いた。

「仕方ありません。アシル様の気が静まるまで、少し時間を置きましょう」

ルカの様子見ていると、なんだかとっても申し訳ない気持ちなってしまった。

あたしって、すぐ思った事を口にしてしまうタイプだから、昔からよくトラブっちゃうのよね。

もう少し気をつけよう。

大広間を出て次に案内されたのは、２０畳ほどの部屋だった。

天蓋付のベッドに、豪華な装飾が施された家具が所狭しと並んでいる。

はぁー、お城の中も豪華だとは思ったけど、部屋の中も負けないぐらい豪華だな。

部屋の中を見とれていると、ひとりの若い女性が部屋に入ってきて、

ルカはあたしの世話係のカリナ・ビッセルだと紹介した。
あたしはすぐ老師様の所に帰るつもりだったので驚いた。
「この国の命運が鈴様にかかっておりますので、すぐにお返しする訳にはいきません」
「でも見たでしょ、王様に完全に嫌われちゃってるし、花嫁なんてあたしには無理だよ。ましてや国を救うなんて……」
だいたい、あんな性格の悪いヤツ、絶対ヤダよ。
「しかし、今日はもう日も暮れ始めておりますし、今から帰るには危のうございます」
窓の外を見ると確かに、日も暮れかかっている。
確かに電気のないこの国で、日が落ちてからの移動は危ないかもしれない。
仕方ない、とりあえず今日はここに泊まろう。
しばらく居ればあたしが伝説の女性ではなく、なにも出来ないただの人だってわかるだろうし。

第9章

あたしがこの城に来て3日程たった。

城での生活は贅沢そのものだ。

食べきれない程の食事、肌触りの良い衣服、大勢の使用人がいる為、老師様の所にいたように水汲みや薪割りをする必要もない。

城の中を歩けばどこも、すばらしい装飾品に囲まれている。

いつも時代も権力者というのは贅沢をしているものだけど、城の外に出れば生活に困っている人がたくさんいるというのに、こんな贅沢をしていていいものだろうか。

たとえ困っている人がいないとしても、もともと貧乏性のあたしには、城の生活はあまり馴染めるものでは無かった。

その日の夜、湯浴みを終えたあたしはカリナと部屋へ戻る途中、廊下を曲がると人だかりが見えた。

人だかりはこちらの方向に向かって歩いてきているが、壁に等間隔に置いてあるロウソクの明かりだけでは、誰だかよくわからない。

「鈴様、別の道から戻りましょう」

こんな夜に何をしているのかと思っていると、カリナが慌てた様子であたし腕を引っ張った。

「えっ、なんで？　こっちから行った方が早いんじゃないの？」

このまま行ったらなにかマズイことでもあるのかな。

あたしがモタモタしている間に、近づいてきた人だかりに向けてカリナが頭を下げた。

カリナの様子にあたしが目を細めよく見ると、数人の女性に囲まれたアシルだった。

アシルはあたし達に気づくと、あたしから数メートル離れた所で立ち止まった。

「まだこの城に居たのか、二度と俺の前にその顔を見せるなと言ったはずだぞ」

ロウソクだけの明かりでは、表情はよくわからないが、その口調は明らかに不服そうだ。

「あら、おあいにくさま。でも、あたしだって好きでいる訳じゃないわ」

「どれだけここに居ようが、お前のような常識外れを花嫁なんかに迎える気はまったくないからな。さっさと諦めて自分の国に帰れ」

常識外れって……。

自分の事を棚に上げてよく言うわ。

一体あんたってどうゆう教育受けてきたの。

あたしだって、帰れるものならとっくに帰っているわよ。
アシルは言いたい事を言うと女性達を連れて廊下の闇へと消えて行った。
それにあの女性達は一体なんなの。
アシルと一緒にいた女性達は、あきらかに女性としての敵対心をむき出しにした目であたしを睨んで通り過ぎていったのだ。
いくらあたしがトラブルメーカーでも、知らない相手から睨まれる覚えはない。
「鈴様、お部屋へ戻りましょう」
「ね、あのアシルと一緒にいた女性達はなに？」
あたしの質問に、カリナは困ったような顔をした。
その様子は、なんだか聞いちゃいけないこと聞いてしまったかのようだった。
「あっ、言いにくい事だったら無理に言う必要ないから」
そう言ってあたしは自分の部屋へと歩き出すと、カリナはあたしの後を追いながら、言いにくそうに口を開いた。
「隠していてもすぐに分かることですから……。あの女性達は、アシル様の夜のお相手の方です」

カリナの言葉を聞いてあたしは立ち止まった。

「夜の相手って……、一緒に居た女性は４人も居たけど……、全員？」

「……はい」

はいって……、恋愛経験の無いあたしにとっては、その後の言葉をどう繋げたらいいのか分からず困ってしまった。

「夜のお相手と言いましても、鈴様との婚儀が整えばきっと……、そのような事も無くなるかと……」

黙ってしまったあたしをカリナは、どうとったのか慌てた様子でフォローした。

あぁ、そうか、カリナはあたしがアシルと結婚すると思っているんだ。

「ありがとう、カリナ。でも、気にしなくていいから」

再び歩き出したあたしの後を申し訳なさそうに後を追う。

「私、何か暖かい飲み物をお持ちしますね」

部屋の前まで来ると、気まずいと思ったのか、カリナは元来た廊下を戻って行った。

あたしは部屋に入り、部屋のロウソクに火を灯すと、ベッドの上に

座りそのまま背中から倒れ込んだ。

まったく、あのアシルは何を考えてんだろ。

女遊びしている暇があれば、世の中の事にもっと目を向ければいいのに。

国民が大変な思いをしている事を、彼はちゃんとわかっているのだろうか。

あんな人を王に持った国民は、かわいそうだわ。

それに、あたしに早く帰れって。

あたしがなぜまだこの国に居るかをまったく理解していない。

というか、理解する気がないんだろうな、そんな気がする。

ベッドの上で寝返りをうつと、窓の外にきれいな月が見えた。

あたしは起き上がり、バルコニーに出て夜空を見上げる。

元の世界でも夜空をなんてまともに見上げたこと無かったけど、月ってこんなにきれいだったんだ。

あぁ、早く元の世界に戻りたい。

夜空を見上げていたら、なんだかセンチメンタルな気分になってきたその時、どこからか乾いた笛の音が聞こえてきた。

こんな夜に笛の音なんて、どこから聞こえてくるんだろう。
バルコニーの階段を下り、笛の音が聞こえる方向へとあたしは足を進めた。
しばらく歩いていると、池の近くに誰か立っている。
「誰？」
あたしはそっと近づいたつもりだったが、足音が聞こえていたらしい。
「ごめんなさい。邪魔をするつもりはなかったの。ただ、あまりにもきれいな音色だったから、近くで聞いてみたくなって」
相手に警戒されない様、しゃべりながらそっと近づいた。
近くでよく見ると、１０代後半の若い男性だった。
「君は？　見かけない顔だね」
「あたし、鈴。少し前からこの城でお世話になっているの」
あたしが自己紹介すると、彼はあたしの顔をジッと見た。
「王の花嫁って、君の事か」
なんでわかったんだろうと不思議そうにしていていると、彼はクスッと笑った。

「黒い髪と瞳を持つ女性は、君以外にこの城には居ないからね」

あぁ、そうか。

夜の暗闇で髪や瞳の黒さなんて分からないと思っていたけど、夜でもやっぱり目立つんだ。

「今夜は特に月が明るいから、君の黒髪がとても奇麗に見える」

何気ない一言のつもりだったんだろうけど、男の人に髪が奇麗なんて初めて言われた。

しかも、真っすぐ見つめられて言われてしまうと、なんだかとても照れて下を向いてしまう。

「そうだ、なにか聞かせて」

照れているのを見透かされない様、話を逸らした。

「いいよ」

そう言うと彼はさっきとは違う音を奏で始めた。

それはとても繊細で、なぜか切ない気分になってくる音色だった。

最後まで演奏が終わると、あたしは精一杯の拍手を送った。

「とても良かった」

素直に感想を述べると、彼は照れたように笑った。

笛を吹いている時にはとても大人びて見えたけど、笑った顔は年相応に見える。

「鈴様！」

名前を呼ばれて振り向くと、カリナが慌てた様子でこちらに向かって来る。

「どうしたの？　そんなに慌てて」

「良かったぁ、お部屋にお飲み物をお持ちしたら、お姿見えなかったので……」

走ってきたカリナは息を荒くしながら言った。

「もしかして、探してたの？」

「探してたの、じゃありません！　何かあったのかと、私は心底心配しました」

カリナの声が若干涙ぐんでいる。

「ご、ごめん。そんなつもりじゃなかったんだけど……」

「鈴様、ここにおられましたか」

カリナを慰めていると、そこにルカがやって来た。

「ルカも捜してくれてたの？　ごめんね、なんだか迷惑かけちゃっ

たみたいで」

いつの騒ぎが大きくなってしまったみたいで、黙って部屋を出て来てしまった事を申し訳なく思った。

まさか、こんなに騒ぎになっているとは思わなかったんだ。

「こんな所で、何をされていたのですか？」

「ああ、彼がね……」

ルカの質問にあたしは彼を紹介しようと振り向くと、そこには誰も居なかった。

あれ、何処に行ったんだろ。

あたしは辺りをキョロキョロと見渡したが、まったく姿が見えない。

「どうされたんですか？」

挙動不審な行動にルカが不思議そうに聞いた。

「え、いや……。さっきまで、ここに人が居たんだけど……」

「人……、ですか？」

「ええ、そこに居たんだけど」

ホント、何処に行っちゃったんだろう。

そういえば、あたし彼の名前をまだ聞いていない。

「私が来た時には、誰もおりませんでしたよ」

ようやく落ち着きを取り戻したカリナが言った。

ルカは近くに居た兵士を呼び寄せた。

「不審者が近くに居るかもしれん。この辺りを全て調べろ」

その言葉を聞いてあたしは焦った。

「ルカ、あたしの勘違いだと思う。暗いからきっと何かと見間違えのかも」

「……それなら良いのですが」

あんなやさしい音色を奏でる彼が、不審者だとは思えない。

急に姿が見えなくなったのは何か用事でも思い出したのだろう。

「ゴメンね、いろいろ心配かけちゃって。さ、部屋に帰ろ」

あたしはふたりを促して、その場を後にした。

第１０章

「あら、あそこに居るのはアシル様とルカ様だわ」

お城にいてもなにもする事のないあたしは、夕方はカリナと城内を散歩するのが日課になっていた。

中庭へと出ようとした所で立ち止まったカリナの目線の先に目をやると、そこにはアシルとルカが剣を持って向き合っていた。

２人は向き合ったまま、どちらからも動こうとはしない。

いや、しないんじゃなく、出来ないんだ。

２人の間に流れる空気はピリッと張り詰めていて、ほんの少しの油断も命取りになりかねない雰囲気が漂っている。

その均衡を最初に破ったのはアシルだ。

ルカに一方的な攻撃を繰り出している。

一方、ルカは防戦するのに精一杯の様子だ。

何度か剣が交わり、アシルの最後の一撃でルカの剣が宙を舞、あたし達から５メートル程離れた所に突き刺さり、カリナの小さな悲鳴と共に決着が付いた。

剣を失ったルカはアシルひざまずき、頭を下げた。

「参りました」

ルカの言葉にアシルは１０代の少年らしい笑顔で満足そうに笑った。

あら、あんなかわいい笑顔で笑えるんじゃない。

そう思っているとアシルと目が合った。

「そこで何をしている」

決着がついた事で、アシルはようやくあたし達が居る事に気付いたようだ。

「お前に、剣の見学を許した覚えはないぞ」

また、始まった。

まったく、顔を合わせりゃ嫌味しか言えないのかねぇ。

笑顔がかわいいなんて、前言撤回！

「誰があんたなんか。あたしが見てたのは、ルカであってあんたじゃないわ。自惚れてんじないわよ」

売り言葉に買い言葉とはまさしくこのことだ。

言わないでおこうと思っていても、アシルの憎まれ口を聞くとつい言い返してしまう。

するとアシルは一気に不機嫌な顔にった。

「そういえば、鈴様は剣が使えるとか」
睨み合っていたあたしとアシルの間にルカが割り込んだ。
話題を変えてその場と取り繕うとしたようだが、それが最悪の方向へと話が動く。
「女の分際で剣を扱うとは、とことん常識外れだな」
アシルは小馬鹿にしとように鼻でフンと笑った。
「女だからって、馬鹿にしないでよ！　それって男女差別もいいとこだわ！　言っとくけど、あんた程度の腕だったら、確実に勝つ自信があるわよ。バカにしないで！」
あたしは一番触れて欲しくない言葉を聞いた事で、挑戦的な言葉で言い返すと、アシルはカッと怒りで頬を赤くした。
「俺に勝てるだと！？　ならば、そこにある剣を取れ！」
アシルは持っている剣で、地面に突き刺さったルカの剣を指した。
あたしだって、好きで剣道をやってきたわけじゃない！
それを、女だからってなんだっていうのよ！
いいわ、少しは痛い目にあえばいいのよ。
あんたのその性格の悪さを叩きのめしてやる！

あたしは前に進み出て、剣の柄に手をかけた。
カリナは突然の状況に言葉が出ず、両手で口元を覆い、顔が蒼白になっている。
「鈴様、おやめください！」
ルカが慌てて止めに入ったが、あたしは構わず剣を地面から抜いた。
剣の柄を両手で握り、体の正面で構える。
「なんだ、その剣の持ち方は。そんな持ち方で俺に本気で勝てると思っているのか」
「あんたの知っている世界だけがすべてだと思ったら大間違いよ！」
アシルは剣を片手で構えている。
きっと、この国ではあたしのように両手で剣を構える人はいないのかもしれない。
世界はね、あんたが思っているより広いのよ！
あたし達はジッと睨み合い、重苦しい空気が辺りに流れた。
それにしても、重い……。
初めて剣を手にしたけど、こんなに重いなんて知らなかった。

剣道で使っていた竹刀の倍ぐらいあるかもしれない。

そして、この剣の重さがあたしの気持ちを冷静にさせていった。

これは竹刀なんかじゃなく、その気になれば人を殺す事のできる物なのだと。

しばらく睨み合った後、ゆっくりと剣を下ろし、ルカに返した。

「どうした、怖じ気づいたのか」

「勝つのが目に見えてる勝負をするのが、バカらしくなっただけよ」

「バカらしいとはなんだ！」

本気で怒りだしたアシルを無視して、あたしはある場所へと歩き出した。

第11章

あたしは勢い良く扉を押し開いた。

「お婆！　居る？」

アシル達と別れ、あたしはまっすぐお婆の家へと向かった。

「あいかわらず騒がしい」

お婆は奥の部屋から迷惑そうな顔をしながら姿を現した。

「いつになったらあたしを元の世界に戻してくれるの！」

「勢い良く来たと思ったら、なんじゃ、そんな事か」

そんな事って……。

あたしにとってはすっごく大事な事なのに、なにその他人事のような言葉は！

「言っただろ、すぐには返せんと。それにおぬしはまだここに来た目的を果たしておらんだろうが」

「それはそっちが勝手に決めた事で、あたしには関係ないでしょ。それに、あんな性格の悪いヤツ、とてもじゃないけど無理！」

お婆はあたしに背を向け、何かの作業をし始めた。

「だいたい、この世界を救うのがなんであたしなわけ？　あたしなんかにそんなこと出来るわけないでしょ」

そうよ、そもそもなんであたしなんだろう。

黒い瞳と髪を持つ人なんて、アジア人ならほとんどの人がそうじゃん。

あたしである必要はない。

お婆は作業を終えると、あたしの前にコップを差し出し、あたしは反射的にそれを受け取った。

コップの中身は緑色をしていて、お茶というよりは抹茶のようだ。

「とりあえず、それでも飲め」

コップの中身が見慣れた色だったことから、あたしは言われるがままま一口飲んだ。

げっ！　まずっ！

あまりのまずさにあたしは何度かむせた。

「なによ、これ……」

かなり勢いの下がったあたしがようやく抗議の声を出すと、お婆は楽しそうにニヤリと笑った。

「どうもおぬしは短気な所があるようだからな、おぬしの為に特別

に作ってやった漢方じゃよ。安心せい、毒は入っとらん」

当たり前だよ！

そんなモン入れられてたまるか。

だいたい、これは人に出していいもんじゃないでしょ。

あぁ、ホントマズイ……。

すっかり意気消沈したあたしは、近くにあった椅子に腰を下ろした。

「ようやく大人しくなったの」

お婆って実力行使に出るタイプなのね。

気をつけよう。

「おぬしは、運命という言葉を知っておるか？」

「そりゃ、まぁ……」

「あの術は、おぬしを選んで呼び出したんではない。この国を救える人物を呼んだんだよ」

やっぱり、あたしじゃなくてもいいってことなんじゃ……。

「術をかける時、この全宇宙空間全てに対して呼び掛けた結果おぬしが現れた、それが運命というものだ」

あまりにも簡潔した話で意味がサッパリわからない。

「それって、どうゆう意味？」

「おぬしのその頭はただの飾りか。もう少ししっかり頭を働かさんか」

だって、わからないんだからしょうがないじゃん。

「運命とは、天命によって最初から定められた運命の事。すなわち、おぬしがこの世界に来た事、それこそが運命というもの」

ここへ来るとこは最初から決まっていたこと？

そんな事言われてはいそうですかって、納得出来るわけない。

あたしは特に何かが出来るわけじゃないし、ただの女子大生ってだけなのに。

「おぬしはここへ来てから何をした？」

あたしが納得出来ない顔をしていると、お婆が問いかけた。

何をって……。

「何もやっていない者が最初から出来ないと口にするな。本当におぬしが何も出来ないのなら、最初からここには呼ばれてはおらんだろうよ」

第12章

その夜、寝付けないあたしはバルコニーの階段を下り、夜空を見上げながら歩いた。

あたしは何をしているんだろう。

『おぬしはここへ来てから何をした？』

お婆の言葉が胸に残る。

じゃ、あたしは何をすればいいの？

あたしに何か出来る事なんてあるんだろうか……。

本当に必要とされてあたしはここに来たのだろうか……。

あたしは城に来てからの事を思い返した。

しかし、思い返せばかえすほどアシルとの喧嘩しか思い出さない。

だめだこりゃ……。

アシルとの喧嘩しか思い出さないなんて、ますます何の為に来たのかわからなくなる。

あたしがここに来たのって、やっぱり何かの間違えだよ。

それに、夕方のあの喧嘩は思い出すだけで嫌になる。

アシルの言葉に煽られて剣を握った。
もう剣道はしないって決めていたのに……。
しかも剣なんて人を殺すためのものじゃない。
いくら言葉に煽られたからって、手にしていいもんじゃない。
それに、アシルのあの言葉……。
『女のくせに』
そう、あたしが剣道をやらなくなった最大の理由だ。
祖父が剣道道場を開校していたため、物心つく頃にはもう竹刀を握っていた。
大会に出られる年齢になると、あたしは運動神経の良さから数々の大会で優勝した。
小学校高学年になる頃には歳の近い子では男も女も相手にならず、必ず年上が練習相手だった。
『あいつ、絶対女じゃねえよな』
『ホント、女のくせに男に勝つなんて、普通じゃないぜ』
同級生の男の子達の口から出た言葉は、多感期のあたしの胸に突き刺さった。

たまたま祖父が道場をやっていた、それだけの理由で始めた剣道は、あたしから女の子らしさを見えなくしてしまったのだ。

剣道は自分からやりたくてやっていたんじゃない。

それだけに、アシルに言われた『女のくせに』という言葉がカチンときた。

「また会ったね」

急に声をかけられ、声の方向を見るとそこには以前会ったあの彼が居た。

いつのまにか、以前彼に出会ったあの池まで歩いてきていたらしい。

「どうしたの？　浮かない顔をして」

「うん、ちょっとね。なんだか寝付けなくて」

「そう」

そう言うと彼は何も聞かず、あたし達は一緒にしばらく空を見上げていた。

「そういえば、名前聞いてなかったよね」

「ミケル、ミケル・リッツ」

ミケルは名前を言うと、また黙って空を見上げている。

「ね、ミケルは女性に剣で負けた事ってある？」

あたしの突然の質問に驚く事もなく、少し間をおいてから答えた。

「この国では女性が剣を持つ事自体ないから、負けた事がないことになるのかな」

「じゃ、もし剣を持つ女性がいて、負けたりしたらやっぱりショックだよね？」

ミケルはまた考えるように黙った後、口を開いた。

「それは、人によると思うよ」

今まで夜空を見上げていたミケルがあたしの方を見た。

「僕は今までいろんな国を旅して来たんだ。だから、この国の常識だけがすべてじゃないと思うし、実際そうだった。ただ……」

ただ？

「もし、男に勝てる女剣士がいるとしたら、会ってみたいな」

「会ってどうするの？」

「だって、女が男に勝つなんてよほど努力した証拠だろ。負けるってことは自分の鍛錬不足が原因なんだから、負けた事をショックに思う前に、俺だったらその女性を尊敬するよ」

衝撃的だった。
尊敬するなんて言葉が出てくるなんて、思ってもみなかったから。
なんだか長い間胸に刺さっていた刺がスッと抜けたような気がし、
思わずあたしはミケルの顔をマジマジ見てしまった。
「どうしたの？　ずいぶん驚いた顔して」
「え、あ、いや……。なんだか、意外な答えだったから」
ミケルはクスッと笑った。
「そういえば、今日は笛を持ってないんだね」
「ああ、今日は花を見に来たんだ」
「花？」
ミケルの視線の先をよく見ると、白くて小さな花がいくつも咲いている。
「かわいい花」
「この花はルクの花といって、本来この国の花じゃないんだけど、他の国で咲いているのを見つけて、ここへ種を蒔いたんだ」
「ミケルが育てたの？」
「この花は生命力が強いから、種さえ蒔けば自生するんだよ」

ミケルは花の前でしゃがみ、やさしく花を撫でた。

「普通、花は太陽の光を浴びて咲くだろ。だけど、この花は月の光で咲く花なんだ。人の目に留まる事無くひっそりと咲いて、人目を避けるように朝には花を閉じてしまう」

その時のミケルはとても寂しげで、今にも消えてしまうんじゃないかって思えた。

「太陽の下で生き生きと咲く花と同じようには必要とされていない事を知っているから、この花は夜に咲く事しかできないのさ」

なんだかミケルの言葉は、花の事を話しながらまるで自分の事を投影して話しているように感じられる。

「あたしは、この花が太陽の下で必要とされていないから、夜に咲くことしかできないなんて思えない」

ミケルは花を撫でていた手を止めた。

「この花は、自分の一番美しい姿を知っているんだよ。太陽の下で咲くよりも、もっと奇麗に咲けるのが月の光の下だっただけで、決して人目を忍んで咲いているわけじゃないと思う。だって、そうでしょ、ちゃんと咲いている事を少なくともミケルは知っていて、こうして花を見に来ているじゃない」

ミケルは立ち上がりあたしの顔をジッと見つめている。

「そりゃ、この花がこんなに奇麗に咲く事を知っている人は少ない

かもしれないけど、それでも、こうやって咲いている自分の姿を見に来てくれる人の為に、一生懸命咲いているんだよ。だから、必要とされていないなんて、言わないで」

最後まで言い切ると同時に、ミケルを急にあたしを抱きしめた。

え、なに！？

一瞬目の前が真っ暗になり、何が起こったのかすぐには理解できない。

あ、あたし、もしかして抱きしめられてる？

そう気づくと急に心臓が、跳ね上がった。

きゃー、彼氏いない歴２０年のあたしには刺激が強すぎる。

「ミ、ミケル？」

混乱する頭の中で、あたしはやっとの事で声を出してみた。

「僕は、君と出会えた事を神に感謝するよ」

ミケルはあたしを解放すると、近くにあったルクの花を摘み、あたしの前に差し出した。

「この花は安眠効果があるから、ベッドの近くに置いておくといいよ」

「あ、ありがとう」

ミケルの顔は、ルクの花の話をしていた時とは違い、なんだかやさしげな表情をしていた。

第13章

「なんだか、ずいぶん楽しそうですね」

朝の身支度を終えた頃、カリナがやってきてなにやら忙しそうに動き回りながらあたしに言った。

「なにか、いいことでもあったのですか？」

「うん、ちょっとね」

あたしはベッドのそばにある窓辺に飾っていた、ルクの花の蕾をそっと触った。

「そうですか。それより、鈴様。そろそろお出かけの準備を」

「出かける準備？」

「ルカ様から聞いておりませんか？」

その時、扉がノックされルカが顔を出した。

「ね、出かけるって、どうゆうこと？」

「昨日はわたしの不用意な発言でご迷惑をおかけしましたので、お詫びに狩りへご招待したいと思いまして」

狩り……？

「ここから少し行った所に王家の狩り場がございます。ちょうど、今日からアシル様が行く予定をしておりましたので、よろしければご一緒にと思いまして」

「狩りなんて、やったことないし」

「狩りには参加しなくても、ご覧になるだけでもどうでしょう。この国の事もいろいろ知っていただく良い機会かと」

あたしはどうしようか迷ったが、せっかくの機会だし結局行く事にした。

しかし、出発したのがお昼を過ぎていたこともあり、2時間程馬に揺られ王家の別荘へ着いたのは夕方近くだった。

狩りは明日からだということで部屋でゆっくりと過ごし、湯浴みを終え部屋に戻る途中、最初にいた部屋とは反対方向に行こうとするカリナを呼び止めた。

「方向違うんじゃない？」

「お休みしていただくお部屋は別で用意しておりますので」

なんだか慌てた様子のカリナを不審に思いながらも、あたしは言われた通りの部屋へと案内してもらった。

「それでは、わたくしここで」

いつもなら、一緒に部屋まで入って来るカリナが扉の前で言ったので、あたしはおやすみを言って部屋へと入って扉を閉めた。

2部屋ある部屋の壁にはすでに火が灯されている。

あたしが奥にある寝室に足を踏み入れると、人影が見えた。

人ってビックリすると意外に声って出ないもので、一瞬体が固まり息を飲んだ。

「誰！」

数秒後に出た言葉にこちらを向いた人物はアシルだった。

突然現れたあたしにアシルは驚いたように目を丸くした。

「なぜ、お前がここにいる？」

「それはあたしの台詞よ！　勝手に人の部屋に入ってなにしてんのよ！」

「お前の部屋だと。何を勘違いしている、ここは俺の部屋だ！」

俺の部屋って、一体どうゆうこと？

部屋を間違えた？

カリナがまだ近くに居るかもしれない。

あたしは訳が分からないまま急いでドアまで行き、ノブに手をかけた。

しかし、いつのまにか鍵が閉まっていて開かない。
なんで鍵がかかっているの！
「カリナ、カリナ！」
あたしは扉を叩きながら、カリナの名前を呼んだ。
「鈴様」
すると、扉の向こうからカリナの声が聞こえて来た。
「カリナ、そこにいるならこの扉を開けてくれない？　なぜか鍵がかかっているみたい」
「申し訳ございませんが、扉を開ける訳にはまいりません」
申し訳なさそうな声でカリナが言った。
「なんで！？」
「アシル様の部屋へご案内するようにとのご命令でして」
はぁ？
「命令って、どうゆうこと？　一体誰が……」
「アシル様と鈴様の仲が良くならない事を心配しての事でございます。今夜はおふたりでごゆっくりお過ごしください」

ごゆっくりって……。

アシルと一緒にゆっくり出来る訳ないじゃない！

第１４章

「無理！　絶対無理！」

「わたくしはこれで失礼致します」

「カリナ、開けて！　開けてよ！」

カリナの言葉に焦ったあたしは、何度も扉を叩いた。

「やめておけ、無駄だ」

あたしが振り向くと、いつのまにか後ろにアシルが立っていた。

無駄って……。

「あんたこの国王様なんでしょ。開けるように言ってよ」

「どうせ、長老達の仕業だろ。それなら、何を言っても無駄だ」

そんな……。

あたしは目の前が真っ暗になるのを感じた。

ここから出れないってことは、一晩アシルと一緒？

あぁ、最悪だぁ。

「簡単に騙されやがって」

落ち込むあたしに、アシルは無情な言葉を言った。

「そうゆう自分はどうなのよ！」

すると、アシルはあたしの両サイドを塞ぐようにして扉に手を叩き付け、あたしは身動きができない状態に追いつめられた。

「何が不満かは知らないが、王の寝室へ来る事がどれだけ名誉な事か、お前にはわからんのか」

睨むようにあたしを見ているが、口調はからかっているようにも聞こえる。

「あたしには何が名誉な事なのかさっぱり理解できないわね。だいたい、長老だかなんだか知らないけど、自分の意見の通らない王様なんて、情けない！」

その瞬間、アシルの顔が怒りで一杯になった。

「ここへ来る事がどれだけ名誉な事か、わからないなら体で教えてやろう」

アシルはあたしの顎に右手を添え、強引に上を向けると乱暴に唇を重ねた。

あたしは何が起こったのかわからず、呆然としてしまった。

えっ、なに？

これって、もしかして……、キス？

そうと気づくとあたしは精一杯の力を振り絞り、アシルの胸を両手で押しやった。

冗談じゃない！

あたしのファーストキスだったのよ！

無理矢理キスをされた事が悔しいくて情けなくて、目に涙が溢れてきた。

アシルは勢い良くあたしから離れたが、あたしの目からは涙が溢れ出て来ているのを見て驚いた顔をしている。

「あたしを、あんたの取り巻き達と一緒にしないで！」

ファーストキスは大好きな人と、ロマンチックな場所でって、憧れてたのに……。

悔しさで涙が止まらない。

「もう、イヤ！　早くあたしを元の世界に返して！　あたしは伝説女性なんかじゃない。普通の一般市民で、ただの女子大生なの。なのに、なのに……」

あたしは扉に背中を付けたまま、ズルズルッとその場に座り込んだ。

「お前は……、自ら望んで城に来たのではないのか？」

泣きわめくあたしに、戸惑ったような声で確認するようにアシルが声をかけた。

「あんたは今まで何を聞いていたのよ。言ったでしょ、勝手にあたしを呼んでおいてって」

しばらくの沈黙の後、アシルが仕方なさそうな声で口を開いた。

「ならば、俺から帰れる様話をしてやる」

アシルの意外な言葉にビタッと涙が止まった。

「……ホントに？」

「あぁ、だから、泣くな」

どうゆう心境の変化だろうか、いままでの態度からは想像できない。

無理矢理キスをしたお詫びのつもりだろうか。

「あとは、鍵が開くまで好きにしていろ」

アシルはそれだけ言うと、スタスタと寝室へと戻って行った。

その事があたしの気持ちをホッとさせたとたん、一気に疲れが襲ってきた。

アシルは好きにしていいって言っていたけど……。

よく考えたらベッドは寝室にひとつだけじゃ……。

そう思ったらさっきのキスが生々しく記憶に甦って急に鼓動が早くなった。

あたしったら、なに思い出してんだろ。

好きでもない人とのキスなんて、キスじゃないわ。

そうよ、落ち着けあたし。

事故にでもあったと思って忘れよう。

あたしは寝床を確保すべくそっと寝室を覗くと、思ったとおりベッドはひとつだけだ。

しかも、そこにはアシルがすでに横になっている。

この状況で一体どう好きにしろって言うのよ。

だいたい、ベッドがひとつしかないなら女性に譲るのが普通なんじゃないの。

あたしはツカツカとベッドに近寄ると、上布団を勢い良くはぎ取った。

突然上布団をはぎ取られたことにで、アシルは驚いたようにあたしを見つめている。

「ちょっと、ベッドがひとつしかないなら、女性に譲るのが普通でしょ。なにのんびり寝てんのよ！」

アシルは迷惑そうにあたしを睨んだ。

「俺はこの国の王だぞ。その王に向かってベッドを譲れだと！とても正気で言っているとは思えん。バカか、お前は」

「バカとはなによ！　レディーファーストって言葉知らないの」

「そんな言葉は知らん」

アシルははぎ取られた布団を被り直し、再び横になった。

なに、その態度は！

「じゃ、あたしはどこで寝ろっていうのよ」

こちらを見る事なくアシルが指差した方向を見ると、それはソファだった。

「ソファで寝ろっていうの！」

あたしの抗議の言葉は無視され、あたしより体格のいいアシルをベッドから退かせる事も出来ず、しぶしぶソファで寝ることとなってしまった。

女性をこんな所へ寝かせて、自分はのうのうとベッドに寝てるなんて、信じらんない。

一体どうゆう神経してんのよ。

アシルのバカ！

第１４章（後書き）

第15章

結局あたしは疲れもあってか、ソファでもグッスリと寝た。

朝早くに迎え来たカリナは、一番最初に謝った。

「昨夜は申し訳ございませんでした」

「いいよ、もう」

誰の差し金か知らないけど、きっと断れなかったんだと思う。

それでも謝るカリナをなだめながら、あたしは朝食の後、アシル達と狩りに出かけた。

しかし、狩り場に着いたところで、狩りをやった事もないあたしは、しばらくすると飽きてきてしまった。

そんなあたしにルカは気を使って、馬の乗り方を教えてくれた。

馬に乗れないあたしはいつもルカと一緒に乗せてもらっていたが、少しずつひとりで乗れるようになると、だんだん楽しくなってくる。

歩かせては止まったり、軽く駆け足をさせた時には振動の凄さに驚いたりして過ごした。

ちょうど一段落ついた頃に、獲物を追いかけて別行動をしていたアシル達が帰ってきた。

どうやら獲物に逃げられたらしく、何も捕ることが出来ずに帰って来たようだ。

なんだか不機嫌そうにしているアシルを見ると目が合い、あたしの心臓がドキッと跳ね上がり、目を逸らした。

なに意識してるんだろう。

「鈴様、お顔が赤いですが、大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫よ」

心配そうに言ったルカに、あたしは慌てて首を横に振った。

まさか、アシルと目が合って昨日のキスの事を思い出したなんて言えない。

あたしが必死で平常心を保とうとしたその時、少し離れた木の影から人相の悪そうな5人が出て来た。

明らかに友好的ではないその態度に、あたし達の中に一気に緊張が走った。

「鈴様、わたしのそばを離れないでください」

そう言うとルカはあたしを背中に隠し、剣を抜くと同時に男達はあたし達に襲いかかってきた。

なに、なんなの、この人達は！

しかも、こちらの人数は同じ5人とはいえ、内ひとりはあたしだから人数的にはこっちが不利だ。

剣を交える音があちらこちらから響いている。

あたしは必死でルカのそばを離れないようにしていたが、しばらくするとルカが相手の脇腹に剣を突き刺し、勝敗がついた。

血しぶきが飛び、ルカは返り血を浴びている。

あたしは初めて人が刺され、その場に崩れ落ちて行くのを見て、口元に手をやり小さく悲鳴を上げた。

だって、そうでしょ。

人が殺される所を見るなんて、元の世界じゃありえない。

一体この世界の常識ってどうなってんのよ！

周りを見ると、襲ってきた他の2人も地面に倒れている。

体制が不利だとわかると、男達は引き上げ始めた。

しかし、逃さず追い始めたアシル達を目で追うと、少し離れた場所にある草影が揺れた。

よく見ると、草影に隠れて弓矢を引いている男がアシルを狙っている。

しかし、アシルは男達に気を取られ気づいていない。

危ない！

あたしはルカから離れると同時に弓矢が男の手から離れる小さい音がし、アシルを思いっきり突き飛ばした。

その瞬間、左肩に大きな衝撃と共に急激な熱さを感じ、その次に激しい痛みが襲ってきた。

右手で左肩をそっと触ると、ヌルっとした感触を感じた。

掌を見ると真っ赤な血で染まっている。

なに、これ……。

自分に起こっている現状がすぐには理解できない。

もしかして、弓矢が刺さったのかな。

「何をやっているんだお前はっ！」

薄れゆく記憶なかで、アシルの怒鳴り声が聞こえる。

あぁ、あんたってこんな時でも優しくないのね。

そして、あたしはそのまま意識を失っていった。

第16章

アシルが鈴の部屋の前まで来ると、ちょうど医者が鈴の部屋から出て来たところだった。

「どうだ？」

「運良く急所は外れておりますが、出血が思った以上にありまして、熱が下がらなければ今夜が山かと」

「何のためにお前を呼んだと思っているんだ」

軽い口調の医者にイラつきを感じ、医者を睨むと、アシルの冷たい視線に医者はすくみ上がった。

「も、もちろん万全を尽くすつもりでおります」

「当たり前だ！」

「それでは、わたくしは薬を取ってまいりますので」

アシルのただならぬ態度に、医者は慌てたようにその場を後にした。

鈴の部屋に入ると、カリナが鈴の看病をしていて、アシルに気付き頭を下げた。

「様子は？」

「熱が高く、かなりお苦しそうです。熱を下げるための薬を煎じた

のですが、鈴様の状態では飲ませることも出来ないままで」
見ると鈴は少し口を開き、苦しそうに肩で息をしている。
「わたくしは、一度水を換えてまいります」
カリナはそう言って桶を持つと、部屋を出て行った。
アシルはベッドの縁に座り、そっと鈴の頬に手を当てた。
鈴の頬は火がついたように熱い。
一体何を考えているんだ、この女は。
普通女というものはニコニコしながら置物のように大人しく、男の横にただいるものじゃないのか。
それをこの女は……。
剣は手にしたり、ことごとく俺につっかかってくる。
その上、俺を庇って矢に撃たれる始末。
なんて規格外の女なんだ。
自分の常識がまったく当てはまらない鈴の行動に、アシルは戸惑いを感じていた。
伝説の女だと城に連れて来られた時には、俺に政略結婚をさせる為に長老達が伝説の女性に仕立て上げた偽物だと思っていた。

冷たくあしらえば泣いて故郷に帰ると思っていたが、何をしてもまったく動じる様子が無い。

しかもこの女の話では納得の上で自ら城に来たのではないという。

それなら、何処から来たというのだ。

しかも、驚くべきは俺と同じ黒い髪に瞳を持っていたことだ。

この国だけではなく、近隣諸国を捜したとしても、黒い髪と瞳を持つものは俺以外に存在しないというのに。

この女は本当に伝説の女なのか……。

アシルの中でさまざまな疑問が浮かんで来る。

アシルは頬に当てていた手で、そっと髪を優しく何度も撫でた。

まったく、不思議な女だ……。

アシルは煎じ薬の器を手に取ると一気に自分の口の中へ含み、そっと唇を重ねた。

アシルはゆっくりと煎じ薬を鈴へと流し込む。

最後まで煎じ薬を流し込むと、アシルはもう一度鈴の髪を優しく撫でた。

扉をノックする音がし、ルカが部屋に入ってきた。

「襲った男達は、どうやら最近あの辺りを縄張りし始めていた山賊のようです。アジトをつきとめましたが、どうなさいますか」

「全員残らず、殺せ」

アシルは迷わず、冷たく言い放った。

第17章

「鈴様、お気づきになりましたか」

目を覚ますと慌てた様子のソニアが視界に映った。

「すぐに、お医者様を呼んでまいります」

カリナは急いで部屋を出て行った。

なんだか、すごく体がだるい。

目が覚めたばかりでいまいち思考もハッキリしない。

なんだか長い夢を見ていた気分だ。

夢の中で、誰かがやさしく髪を撫でてキスしてくれたような……。

そんな夢を見るなんて、あたしって欲求不満なのかな。

痛い！

体を起こそうとすると左肩に痛みが走り、かすかな記憶が甦った。

そっか、あたし矢に当たって……。

それでもどうにか体を起こすと、ちょうどカリナが医者を連れて戻ってきた。

「鈴様！　まだ起きてはいけません」

「まだ少し痛むけど、大丈夫よ」

カリナは驚いて駆け寄り、あたしの背中の後ろに枕を立て背もたれを作ってくれ、医者は傷の検診を始めた。

「すばらしい回復力ですな」

なぜか妙に親切丁寧な医者は、もうしばらくは安静にするようにと言って部屋を出て行った。

「４日も意識が戻らないので、本当に心配いたしました」

えっ、４日も！？

カリナの言葉にあたしは驚いた。

「もうこのまま意識が戻らないのかと……」

「ごめんね、心配かけて」

目に涙を溜めているカリナを慰めながら、ふと思い出した。

「そういえば、アシル達は大丈夫だったの？」

「はい、皆様ご無事です。ルカ様以外はお城に戻られました」

そう、無事なんだ。

よかった……。

それにしても、もう城に戻ったてずいぶん冷たいな。

そういえば矢に刺さった時、アシルに怒鳴られたような……。

あの状況で怒られるとはね。

べつに恩を売るつもりはないけど、もうちょっと優しくていいのになぁ。

「アシル様もとても心配しておりました」

あたしは一瞬耳を疑った。

「アシルが！？」

「はい、毎日お見舞いにいらしてました。それに……」

カリナは急に顔を赤くし、言葉を濁らせた。

「それに、何？」

「その……、煎じ薬をご自分で飲めない鈴様に、アシル様自ら……」

なかなか話が進まず、要領を得ない。

「自ら……？」

「わたくしの口からは言えません！」

言えないって……、そこまで言っといて気になるじゃん！

そこへ、ルカが現れた。

「鈴様、お体の方はどうですか？」

「えっ、うん、大丈夫。心配かけたみたいで」

「そうですか、良かったです。アシル様もとても心配しておりましたから」

またその話しだ。

あのアシルの事を考えると、とてもじゃないけど心配しているようには思えない。

「そんなに心配してたの？」

「それはもう、毎日の様に鈴様の様子を見にきておりましたから。しかもアシル様自ら鈴様に煎じ薬を飲ませるとは、わたくしは驚きました」

「ね、その……飲ませるってどうやって？　あたしは、意識がなかったわけでしょ？」

「それはもちろん、口移しで」

く、口移しぃ！

もしかして、あたしが見た夢は夢じゃなく……。

「あれほど献身的なアシル様を見たのは初めてです」

うれしそうに話すルカとは対照的に目の前が真っ暗になった。

きっと、立っていたらその場に崩れ落ちていたような気がする。

ファーストキスだけでもショックだったのに。

あぁ、立ち直れない……。

「アシル様が薬を飲ませなければ、鈴様もかなり危ない状況でした」

「……あたし、そんなに危ない状況だったの？」

「かなり高熱がでておりましたから」

そうだったんだ……。

いままでのアシルの横柄な態度を考えるとなんだか信じられない事だけど、それでも非常事態だったんたから感謝……、しなきゃ……ね。

そう思いつつもなんだか複雑な気分だった。

第１８章

３日程別荘でゆっくりした後、あたしは城へと帰って来た。

体はかなり良くなったけど、心配性のカリナがベッドから出る事を許してくれなかった。

元々体育会系のあたしにとっては、時間を弄ぶばかりだ。

暇だなぁ。

そこへ部屋に響いたノックの音。

入って来たのはアシルだった。

アシルの顔を見た途端、煎じ薬を口移しで飲ませてくれたことを思い出してしまい、無意識にアシルの唇に目がいってしまう。

あたしってば、何を意識して見てんのよ。

「なに？」

そんな自分を隠すように、ぶっきらぼうに言った。

「元気そうだな」

「あんなことで簡単に死ねないわよ」

強がりを言うあたしを、アシルはフッと笑った。

アシルがあたしに対して笑ったのはこれが初めてだ。
その笑顔にあたしの心臓が、ドキッと高鳴った。
「それだけ元気があれば大丈夫だな」
「な、何の用？」
高鳴った気持ちを隠す様に言ったぶっきらぼうな言葉に、いつもなら攻撃的なアシルだが、今回は気にしている様子はない。
「なぜ、危険を冒してまで俺を庇った？」
なぜと聞かれても……、危ないと思った時に反射的に体が動いてしまっただけで、特に理由なんかない。
「単に見積もりを間違えたのよ。あんたを押し倒した後、自分も避けきれると思ったの。ただ、あんなに矢が早く来るとは思わなかったってゆうか……」
アシルは呆れたように顔を横に振った。
「まったく、本当に規格外な女だ」
規格外とはちょっと失礼だな！
「お前に、褒美をとらせる」
「褒美？」

「ああ、俺の、王の命を救ったんだ。褒美をとらせるのは当然だろ」
褒美……ねぇ……。
あたしは少し考えていたが、特に思いつかなかった。
「いいよ、別に。褒美が欲しくてやったことじゃないし」
「すぐに決める必要は無い。なにか思いついたらその時に言え」
いつもよりやさしいアシルになんだか調子が狂う。
「だが……」
そう言って口を噤んだアシルだったが、少しして口を開いた。
「前に言った、お前を元の世界に戻すというのは無理だ」
えっ、そういえば、そんな約束したっけ。
覚えていてくれてたんだ。
「お婆には掛け合ったが、すぐに帰す事は出来ないと言われた。あの術は、呼んだ本人でないと元の世界には戻せないんだ」
意外な言葉に驚いた。
わざわざお婆に掛け合ったの？

「なんで……、なんでそこまでしてくれるの？」
ついこの前までは、とても友好的な雰囲気とはかけ離れていたのに。
「さぁ、なぜかな」
しばらく黙っていたアシルは、左手をベッドの縁に置いた。
さっきよりもより顔が近付き、心臓の鼓動が早くなるのを感じる。
なんでそんなに不用意に近付くのよ！
心臓に悪いわ！
「どうした、顔が赤いぞ。また熱がでてきたのか」
そう言うとアシルの右手が顔に近付いて来た。
「何でもない、大丈夫よ」
あたしは慌てて顔の前に両手で壁を作った。
だってあんたのせいじゃない。
しかし、アシルはそんなあたしの手を取り握った。
キァー、お願いだからそんなことしないで！
「熱はなさそうだが……、帰って来たばかりで疲れたか」

アシルはあたしの手を握ったままだ。

「そ、そうかもね」

「なら、ゆっくり休め」

アシルはあたしの手を離すと、優しく髪を撫で部屋を出て行った。

あれ、この感覚……。

なんだか覚えがある気がしたが、それがなんだったのか思い出せない。

第19章

その日の夜、アシルに髪を撫でられた時の感覚が何だったのか、思い出せないことが気になって寝付けない。

なんだったんだろう、喉まででかかっているんだけど思い出せない……。

その時、何かを叩く音がした。

なに、何の音？

ベッドから体を起こし、周りを見渡すと、バルコニー側の窓に人影が見えた。

誰！？

もしかして強盗……。

「鈴、僕だよ。ミケル」

ミケル？

あたしはベッドから降りると、バルコニーの扉を開けた。

「ミケル、どうしたの？」

いままで偶然会う事はあっても、わざわざ会いに来てくれたのは初めてだ。

「ごめんね、こんな時間に。鈴がけがをしたって聞いたから」
心配してくれたんだ。
「傷はもう大丈夫なの？」
「うん、大丈夫。お医者様も回復が早いって言ってたし」
「そう、良かった」
ミケルはホッとしたように優しい笑顔を見せた。
「良かったら中に入って」
あたしは部屋の中に入るよう勧めた。
「ありがとう。でも、こんな時間に女性の部屋に入るのはルール違反だから、今日はやめておくよ」
あぁ、ミケルってあたしの事を唯一女性扱いしてくれる人だな。
「今日はこれを届にきただけだから」
ミケルが差し出したのはルクの花だった。
「ありがとう」
あたしはルクの花の香りを嗅いだ。

「あたし、この花の香り好きだな。なんだかとっても落ち着く」
ミケルにクスッと笑うと、そっとあたしを抱き締めた。
あたしは突然の事で身動き出来ない。
「ミケル……？」
「元気そうで良かった。鈴が矢で撃たれたって聞いた時は心臓が止まるかと思ったよ」
そんなに心配してくれてたんだ……。
でも、抱き締められているあたしって……。
こうゆう場合どうすればいいんだろうか、だんだん心臓の鼓動が速くなる。
アシルといい、ミケルといい、一体今日はなんなのよ。
こんなことばかりじゃ、心臓が持たないじゃないわ。
そういえば、前にもミケルに抱きしめられたよね。
きっと、ミケルにとってはハグみたいなものなのかもしれない。
あたしは自分にそう言い聞かせ、気持ちを落ち着かせていると、ようやくミケルがあたしを解放してくれた。
「もう、むちゃな事はしちゃいけないよ」

ミケルはそう言うとあたしの頬にそっとキスをし、また来るねと言って帰っていった。

その場に残されたあたしは、ただただ呆然とするばかりだった。

キス、されちゃった……。

そう思った瞬間、顔に火がついたように熱くなったが、すぐさま顔を横に振った。

あ、挨拶だよね。

ここは日本じゃないもの。

海外でよくいうハグ&キスだよ。

そんな言い訳をしながらあたしは部屋へと戻った。

第２０章

傷口も良くなり、ようやくベッドから開放されたあたしは中庭を散歩していた。

あたしって、つくづく体育系なんだなぁって思う。

やっぱりベッドの上で大人しくしているより、体を動かしている方がいいな。

剣道をしていた頃は、毎日の練習で必ず体を動かしていたあたしにとって、矢で肩を負傷してから、カリナが許してくれなかった事もあるけど、こんなにも長くなにもしないでベッドでジッとしていたのは初めてのことだった。

体を動かしてないと、人っていろんなことを考えてしまう。

大学の事、剣道の事、みんな元気にしてるかな。

そして、この国へ来てからの事。

そんなことを思いながら木々の間を歩いていると、地面に落ちている枝を見つけ手に取った。

不思議、大学にいた頃は剣道なんてもう嫌だと思ったけど、なんだかとても懐かしく思えた。

あたしは手にした枝を軽く振った。

枝は高い音を出し、軽くしなった。
腕全体にかかる空気抵抗がなんだか心地よい。
「ここで何をしている」
声の方へと振り向くと、そこにはアシルがいた。
「こんな所にいて、体の方はいいのか」
この前からなぜかやさしく話しかけてくるアシルに違和感を感じてしまう。
ほんと、どうしたんだろ。
「うん、もう大丈夫。お医者様も大丈夫だって言ってたし」
「そうか」
アシルはそう言ったまま何も話そうとしない。
沈黙が続くとなんだか気まずく思うのはあたしだけだろうか……。
「本当に、剣が使えるのか？」
「なぜ？」
急な質問にあたしが聞き返すと、アシルはあたしの持っていた枝に目線をやった。

あたしは返答に困ってしまった。

以前クルトに説明したが、あまり理解してもらえなかったからだ。

「剣が使えるかどうかという質問なら、答えはノーよ。それに似た事をやっていたっていうだけ」

「それだけと言う割りには、この間は随分威勢のいい事を言っていたようだが」

この間のアシルに煽られて剣を握った時の事を言っているのだろう。

「あ、あれは……、アシルがあまりにも挑戦的だったから、つい……」

確かに、今考えるとかなり無茶な行動だったと思う。

あたしの様子を見てアシルはクスクスと笑い出した。

あ、また笑った。

アシルがあたしの前で笑うなんて……。

意外な事に驚くとともに、年相応の笑顔がとても眩しくて見とれてしまった。

「どうした？」

見とれているあたしに気付いて、アシルが話しかけてきた。

「え……、あ、うん。な、なんでもない」
まさか、見とれていたなんて言えるわけない。
そんなあたしを今度は不思議そうに見ている。
「そういえば、あたし達を襲った山賊ってどうなったの？　捕まったって聞いたけど」
あたしは怪しまれないうちに話題を変えた。
「……殺した」
えっ、今なんて……。
「殺したの……？」
「ああ」
アシルはなんでも無い事の様に答えた。
「なんで！」
あたしの言葉にアシルは心底驚いた様な顔をした。
「なぜだと？　王の命を狙った。理由はそれだけで十分だ」
あたしは山賊に教われた時の事を思い出した。
アシル達も山賊も、まるで人の命なんて気にする様子も無く剣を抜

いていた。
なぜと聞き返した時のアシルの様子を見ていると、きっとこの世界ではそれが当たり前なのだろう。
だけど、あたしは初めて人が殺される所を近くで見たのだ。
あたしの価値観が全てだとは思わないし、元いた世界のルールが必ず正しいとも思わない。
もちろん、私たちを無条件に襲った山賊を弁護する気もない。
それでも、人の命をそんなに簡単に奪ってもいいものなのだろうか。
しかし、アシルにそれを言ってもきっと理解出来ないだろう。
あたしが、この世界の常識が理解出来ないように。
「ね、アシル。あたしにご褒美をくれるっていったよね」
「ああ」
「じゃ、褒美はいいから代わりにあたしの提案を聞いてもらえないかな」
あたしの言葉にアシルには少し怪訝そうな顔をした。
まさか、提案なんて言われるとは思っていなかったのだろう。
しかし、それに構わずあたしはアシルにそれを伝えた。

第21章

重い……。

相変わらず水汲みは重労働だ。

しかも、しばらくベッドの上で過ごす事が多かったあたしにとって、かなり体力が落ちたのを身をもって感じる。

老師様の家まで着くと、水の入った桶を地面に置きその場に座り込んだ。

「相変わらず鈴は水汲みが苦手だね」

そう言って家から出て来たのはクルトだ。

またクルトに言われてしまった……。

「アシル、こっちだよ」

クルトはあたしが置いた桶をひとつ持つと、家の中へとアシルを促した。

あたしと同じ様に水汲みをしていたアシルは、息一つ乱す事無く水の入っている桶2つを持って、クルトの後について家の中に入って行った。

そんな様子をみていると、なんとも置いてかれたような気分になる。

少しは基礎運動だけでもやろうかな。

それにしても、文句を言わずにいるアシルにあたしは驚いていた。

そして、なぜあたし達が老師様の家に居るかというと……。

あたしがアシルにした提案は、一般市民の生活を一緒に体験して欲しいと言ったからだ。

その時のアシルの顔を思い出すと今でも笑えて来る。

最初は驚いた顔をし、次に困惑した表情へと変わっていった。

それはまさに百面相と言ってもいいくらいだ。

もちろん、言ったところで承諾するとは思っていなかったあたしは、本当に言った意味を理解しているのかと何度も確認して、不機嫌にしてしまったぐらいだ。

だって、あのアシルだよ。

すぐには信じられなかったんだもん。

かくしてあたし達はお供を連れず、老師様の所にお世話になることになった。

もちろん、アシルがこの国の王だとは言っていない。

幸いな事にテレビもなければ写真もないこの国では、あまりアシルの顔は知られていないようだ。

それにしても、アシルはここに来てどんな作業をしても何一つ文句を言わずに黙々と働いている。

この間からそうだけど、なんだか人が変わったかのようだ。

「鈴、いつまで座ってんの」

クルトが家の中から顔を出した時、森の中から馬の蹄が聞こえて来た。

その方向へと目線を向けると、2頭の馬がだんだんこちらに近づいてくる。

その姿がハッキリ見え始めると、クルトの顔に笑みが浮かんだ。

「お父さん！」

馬が家の前に着き、体格の良い男性が馬から降りるとクルトは走り出し父親に抱きついた。

その騒がしさに気づいたのか、ソニアも家から出て来てクルトと同じ様に抱きついている。

そしてなにより驚いたのは、もう1頭の馬から降りたのはミケルだった。

ミケルも驚いたようにあたしに近づいてきた。

「鈴、君はここで何をしているの？」

「何って……、ちょっと遊びに……」

まさか、アシルの社会見学とは言えない。

「老師様と知り合いなの？」

「うん、あたしがこの国に来た時、最初に出会ったのが老師様だったの」

「そうだったんだ」

「ミケル、俺は老師様に挨拶をしてくる」

クルトとソニアの父親はミケルにそう告げて、家の中に入って行った。

「クルトとソニアのお父さんと知り合いなの？」

「カイのこと？　カイは傭兵をしていてね、旅先で知り合ったんだ」

その時、家の扉が開きアシルが家から出て来た。

アシルは今までに見た事ない程驚き、そして不快感を顔に表した。

それと同時に、ミケルも驚いた様子だ。

「なぜ……、お前がここに居る？」

しばらくの沈黙の後、最初に口を開いたのはアシルだ。

「それはこちらの台詞だね。ここは王家の所有地ではないと記憶しているけど」

アシルとミケルはお互い睨み合ったまま、目線を外そうとしない。

なに、この状況は……。

ふたりは知り合いなの？

しかし明らかに友好的ではないこの空気を破ったのは、カイだった。

「どうした？」

家からクルトとソニアを連れて出て来たカイは、アシルとミケルの不穏な空気を察したように声をかけた。

「なんでもないよ」

ニコリと笑って答えたえるミケルを不審そうにしているカイだが、それ以上の事を聞こうとはしない。

「鈴、お父さんが帰って来たから、あたし達今日は家へ帰る事になったの」

「そう、よかったね」

ソニアの言葉に、あたしが答えるとうれしそうに笑ってカイの元へと戻って行く。

「鈴、またね」

ミケルはあたしに声を掛けると、アシルを一瞥してカイ達のいる馬の元へと行った。

カイはクルトをミケルはソニアを馬に乗せると、クルトのバイバイという声を残して元来た道へと消えて行った。

「なぜ、あいつを知っている？」

アシルはいつもより低い声で、迫る様にあたしに質問した。

「知ってるっていうか……、ちょっとした知り合いってゆうか……」

悪い事をしている訳でもないのに、アシルのただならぬ雰囲気に押されてあたふたながら答えた。

「そうゆうアシルだって、ミケルと知り合いだなんて」

「あんなヤツは知らん！」

アシルは不機嫌そうに一言言って、家の中に入って行った。

その態度にあっけにとられてしまう。

これってどうどうゆうことなんだろう。

アシルとミケルは明らかに顔見知りだよね……。

しかし、アシルの様子ではとてもじゃないけど、これ以上は聞ける

雰囲気ではなかった。

第２２章

クリトとソニアがいなくなった老師様の家で、まったく話の弾まない夕食を終えると、電気のないこの国の夜は早い。

そして、あたしはその時になってようやく気付いたのだ。

一緒の部屋で寝るんだということを。

部屋にベッドは２つ。

クリトとソニアがいれば男女に別れて寝ればいい事だと思っていたけど、クリトとソニアは家へと帰ってしまった。

老師様の家に他に部屋はない。

そんな事を考えていると、ふとアシルにキスをされた事を思い出してしまった。

あ、あたしてば、意識しすぎだよ！

ふたりっきりになると言っても、ちゃんとベッドは２つあるわけだし……。

アシルは先に湯浴みを終えているし、今日はよく働いたからきっともう寝てるよね。

湯浴みを終えたあたしは仕方がなく、アシルのいる部屋へと向かった。

そっと扉を開け、部屋の中を覗くと、あたしの願いも悲しくアシルはベッドの縁に腰を掛け座っていた。

しかし、何か考え込んでいる様子のアシルはあたしが扉を開けた事も気付いていない。

「アシル？」

扉を閉め、あたしが呼びかけるとようやくあたしの存在に気づいた。

「どうしたの？」

「……なんでもない」

そう言ったままなにもしゃべろうとはしない。

沈黙が重く苦しい……。

こうなったら、さっさと寝てしまおう。

あたしがもうひとつのベッドへと行こうとした時、アシルが口を開いた。

「俺をここに連れて来た目的は何だ？」

目的と言われてもなぁ……。

「目的はあるけど……、ない」

訳のわからない答えにアシルは怪訝そうな顔をし、あたしはしばらく考えてから口を開いた。

「お婆に言われたのよ。この国に来て何をしたのかって。別にこの国がどうなろうとあたしには関係ないし、何かしたところでこの国が変わるとも思えない」

ロウソクの暗い明かりだけを頼りに、もうひとつのベッドの縁に腰を掛け、手に持っていたロウソクをベッドとベッドの間にあるサイドテーブルに置いた。

「だけどね……、怪我をしてずっとベッド上にいると、人っていろんな事を考えちゃうモンなんだよね」

アシルはジッとあたしの話を聞いている。

「お婆の話を総合すると、どう考えてもこの国が変わる事が、あたしが元の世界に帰る事の条件なのかなぁって。それだったら、いつまでもお城で無駄に過ごしているより、自分の出来る所から何かしようかと思ったの。それで、褒美をくれるっていうんだったら、あんたにも協力してもらおうかなって」

アシルはまだ意味が分かっていない顔をしている。

「つまり、この国の根本を変えるにはあんたに一般市民の生活を見てもらうのが一番だと思ったのよ。それがあたしの目的。でもそんなに簡単にいくとも思えないからあってないようなものだよ。それに、素直に来てもらえるとも思ってなかったし」

「俺に、何か出来ると思うか？」

意外な言葉にあたしは一瞬言葉を失った。

「あんた王様なんでしょ。何か出来るのかではなくて、やらなきゃいけないんだよ。でなきゃ……、あたしが元の世界に戻れないじゃない。それじゃ困るのよ」

「そんなに、帰りたいのか」

「あたしまえじゃない！　いきなり有無も言わさずこの国に連れてこられたのよ」

誰も知らない世界にひとり放り出される事がどんなに不安だったかなんて、きっと実際体験した人じゃないと理解なんて出来ないと思う。

あたしが黙ってしまった為、また沈黙になってしまった。

これ以上話す事が無くなってしまったあたしは、もう寝てしまおうとサイドテーブルに置いたロウソクをふき消した瞬間、アシルがあたしの手首を掴んだ。

暗闇の中で手首を掴まれ、あたしの心臓が高鳴った。

な、何！？

「お前は本当に伝説の女なのか」

その質問にあたしは慎重に答えた。

「……違うよ」

また、沈黙が続く。

「あたしは伝説の女性なんかじゃない。ただの一般市民で非力な人間にすぎない」

捕まれた腕を解こうとしても、アシルの手の力が強く解くことが出来ない。

それとともに心臓の鼓動も速くなる。

「この国にとって、伝説の女性がどれほどのものか知らないけど、そんな不確かなものより、あんたのほうがよっぽどこの国の為になにか出来ると思うよ」

あたしは速くなる鼓動に気付かれないよう冷静を装う。

ようやくアシルは掴んでいたあたしの腕を離した。

よかったぁ。

このまま離してくれなかったらどうしようかと思った。

「あたしもう寝るね。久々に体動かしたから疲れちゃった」

さっさとベッドに潜り込んだ。

「お休み」

しばらくするとアシルが自分のベッドに横になった気配がした。

アシルに捕まれた手首にまだ感覚が残っている。

心臓の鼓動も速くなったまま落ち着こうとしない。

その夜、あたしはなかなか寝付けなかった。

第２３章

朝起きるとすでにアシルは部屋にはいなかった。

あたしはというと、昨日の夜はあまりよく眠れなかった。

まったく、誰のせいだよ。

それにしてもアシルは何処へ行ったんだろう。

外から聞こえて来る音にあたしはベッドを降り、窓の外を覗くとアシルが薪割りをしている。

昨日もそうだったけど、最近のアシルは何を考えているのかよくわからない。

もっと気性の荒いわがままなタイプだと思っていたのに、あたしが怪我をしてから怖いぐらいに素直だ。

黙々と薪割りをしているアシルは、国が疲弊していかなければいかない程の悪い王には見えない。

アシルの真意はどこにあるんだろうか。

朝食を終えるとあたしとアシルは老師様の紹介で、農家の手伝いをした。

「あんた達、昼食を持って来たから休憩しな」

この土地所有者である、女主人エルバ・オーリクが体格の良い体を揺らしながら近づいて来た。

「ありがとうございます」

あたしはお礼を言ってアシルと昼食を頂く事にした。

「あんた達が来てくれてホント助かったよ。今年はいつもの年より人手不足でね、どうしようかと思っていたところなんだよ」

「ご家族はいないんですか？」

「うちの亭主は体の弱い人でね、あたしと子供達を置いてさっさと逝っちまったのさ。ふたりの娘も嫁に行っちまって、ここしばらくは近所の人に協力してもらっていたんだけど、去年の不作で税金が払えなくて大勢の人が土地を城に取られちまったんだよ」

エルバは両手を腰において、仕方ないといった様子で答えた。

「土地を取られた者は、土地の所有者からただの雇われ人さ。少ない給金だけでは生活なんてとてもやっていけないからね。みんな出稼ぎに行っちまって、おかげで今年は人手不足さ」

そういえば、以前クルトとソニアがそんなことを言っていたっけ。

「まったく、今の王は何を考えているのかね」

話はアシルの事へと変わっていき、あたしはドキッとした。

「前王の時代は不作の年は税を払わなくて良かったんだけどね。そ

れに比べて、今の王は私腹を肥やす事しか頭にないらしい」

ここに来てから一言もしゃべろうとはしないアシルの様子を横目で伺ったが、その表情は変わる事無く感情を読み取る事が出来ない。

「しかも質のいい作物は他の国に売りさばいたりしているらしくてね、あたし達が手に出来る物は質の悪い物ばかり。そのうえ高値でしか買えないときている」

まさか本人が目の前にいるとは知らず、エルバのおしゃべりは続く。

「このままじゃ、あたし達国民に死ねって言っているようなもんだよ。あんた達も何処から来たか知らないけど、この国で新居を構えるなら考え直した方がいいかもね」

最後の言葉が気になってあたしは聞き返した。

「新居？」

「隠さなくったっていいよ。あんた達のような髪の色は初めて見たからね。どこか他の国から来たんだろ。ま、若いうちはいろいろあるさ」

そう言うとエバルはウインクをし農作業へと戻って行った。

街中を歩く時には目立つ髪をフードで隠していたけど、農作業には邪魔なだけなのでフードを被っていなかった為か、エルバは何か勘違いをしてしまったようだが、訂正する事も出来ないまま農作業を初めてしまった。

しかし、そんなことよりあたしはアシルの事が気になった。
いくら本人だということを知らなくても、だれだけ自分の事を言われれば誰だってショックだよ。
だけど、直接その事を聞く事もできず、あたしは前から聞いてみたかった事を聞いた。
「ね、アシルは何であたしの提案を聞こうと思ったの？」
そう、今回の社会見学は絶対断られると思っていたから、意外にも承諾したのをずっと不思議に思っていたのだ。
アシルはジッと遠くを見つめている。
「俺は……」
「鈴！」
アシルが何か言いかけた時、あたしは名前を呼ばれ振り向くと、クルトがこちらに向かって走って来る。
その後ろにはソニアとカイ、そしてミケルがいた。
「僕達も手伝いに来たよ」
クルトはあたし達の所まで来ると嬉しそうに言った。
「ね、鈴。一緒にやろうよ」

あたしの腕を持ち引っ張るクルトにあたしは仕方がなく立ち上がると、アシルも立ち上がり後から追いついたミケル達と目を会わす事無く作業へと戻って行く。

さっきアシルは何か言いかけていた。

よく考えてみると、アシルから何か話そうとしたのってさっきが初めてだよね。

何を言いかけていたんだろうか……。

気にはなったが、アシルはすでに作業に戻ってしまった。

しかたがない、また後で聞いてみよう。

そしてあたしはクルトに手を引かれるまま農作業へと戻った。

第２４章

社会見学は１泊２日だった為、あたしとアシルは農作業を日が暮れる前に終わり、城へと帰る為街中を歩いているとある会話が耳に入って来た。

「全部で３４個だな。１個４フィルーだから１２５フィルーだ」

店の亭主らしき男が言うと、農作物を持って来た男の子は一生懸命手で数を数え始めたが数が数えられないらしく、いつまで経っても答えが出ない。

見た限りでは男の子は小学校高学年ぐらいなのに、計算がちゃんとできない様子だ。

「ほらよ」

亭主は男の子の計算を待つ事無くお金を男の子に差し出した。

男の子はお金を手に取ったが、店から離れようとせず手にしたお金を見つめている。

「おら、ぼうず。いつまでも店の前にいねぇでさっさと帰りな」

亭主に睨まれ男の子は渋々店を離れようとした。

「ちょっと待ちなさいよ！」

その様子を見ていたあたしは亭主へと近寄った。

「足らない分のお金ちゃんと払いな！」

「なんだお前は」

「全部で３４個で１個４フィルーだったら１２５ではなく１３６でしょ」

亭主はサッと顔色が変わった。

「な、なんの事だ」

「あたしちゃんと聞いてたんだから。誤摩化さずにちゃんとお金払いなよ」

「てめぇには関係ないだろ！」

逆切れし始めた亭主だが、あたしはかまわず言い返した。

「大の大人がこんな子供を騙すなんて、恥ずかしいと思わないの」

その時亭主の右手が上がり、殴られる、そう思ったあたしは反射的に目を閉じ左腕を顔の位置まで上げ防御態勢を取った。

しかし、いつまで経っても衝撃が来る事はなかった。

不思議に思ったあたしはそっと腕を下ろし目を開けると、亭主の腕をアシルが掴んでいる。

よかったぁ。

絶対殴られるって思ったのに。

「払ってやれ」

「うるせぇ」

アシルが言ってもまだ亭主は払おうとしない。

すると、亭主の顔がだんだん苦痛で歪んできた。

アシルは軽く握っているように見えるが、かなり力が入っているようだ。

「わ、わかった。わかったから離せ」

アシルが腕を離すと亭主は渋々お金を男の子に払うと、そそくさと店の中へ逃げてしまった。

男の子がうれしそうにありがとうと言って帰っていく姿を見送った後、あたし達は再び城へと歩きだした。

「さっきは……、ありがとう」

「あの程度の事にいちいち首を突っ込むな」

アシルの言葉にあたしは足を止めた。

「あの程度の事……？」

足を止めたあたしにつられアシルも足を止める。

「なんであの程度の事だなんて言えるの？」

アシルはあたしの言っている事が理解できないようだ。

「あの男の子は本来もらえるはずのお金を騙されていたんだよ。それがどうゆう事かあんたには分からないの」

「騙される方が悪いんだろ」

アシルは面倒くさそうに言った。

「なぜあの子が騙されたのか、ちゃんと考えた事ある？　この国では裕福な家庭でしか勉強ができないってクルトから聞いたわ。裏を変えせばお金に余裕のない家庭に育った子は計算ひとつ出来ないままだってことだよ」

あたしの言っている事を理解しようとしないアシルにあたしはだんだん腹が立ってきた。

「勉強を教えてもらえる人がいない子が、人に騙された事すらわからないまま人生を生きていく事がどれだけ不幸なことか、もっと真剣に考える必要があるんじゃないの！」

アシルは黙ったまま何も言おうとしない。

その態度にますます腹が立ってきた。

「あんたこの国の王なんでしょ！　だったら、もっといろんな事を

真剣に考えなよ。どんな子供でも生きていくうえで必要な勉強をする権利があるし、あんたはそれを提供する義務がある」

表情を変える事ないアシルが、何を考えているかわからない。

「なんで何も言わないの！　いつもみたいに言い返しなさいよ！」

アシルは少し何かを考えた後、あたしの肩に手を置いた。

「帰ろう、人が集まってきている」

アシルの言うとおりあたしの声の大きさが周りに人を集め始めている。

こんな大通りで目立つ事をするべきではない事は十分分かっている。

だけど、あたしの怒りは止まらなかった。

なんでそんなに無関心でいられるの。

なんでそんなに冷静でいられるの。

あたしは肩に置かれたアシルの手を振り払った。

「あんたの態度がそんなんだから、国がどんどん悪い方向へと動いていくんだよ！」

そしてあたしは、アシルを置いて城へと駆け出した。

第２５章

もう嫌だ！

あたしが何か行動に出した所で、アシルにその気がないのならいつまで経っても状況は変わらない。

まったく、アシルはどうゆう教育を受けて育ってきたのよ。

あたしは全身で怒りのオーラを出しながら自分の部屋へと城の中を歩いていると、ルカが前から歩いてきた。

「鈴様、お帰りでしたか。アシル様は一緒ではないのですか？」

「……ちょっと、行き違いがあって……」

あたしがアシルを街中に置いて先に帰ってきた事を話すと、ルカは兵士を呼びすぐに迎えにいくように指示した。

「最近は仲良くされていたと思っておりましたのに、一体なにがあったのですか」

ルカは困ったものだといった表情をした。

別に仲良くしていた訳じゃないけど……。

「あ、そうだ。ルカに聞きたい事があったんだ。ミケルって人知ってる？」

ミケルの事をアシルに聞いても無駄だと思ったあたしは、城に帰ったらルカに聞こうと思っていたのだ。

すると、ルカの顔色がサッと変わった。

「……どこで、その名前を？」

「どこでって……」

ルカの様子を見ているとなんだか聞いてはいけない事を聞いてしまったような感じだ。

そのただならぬ雰囲気は、アシルとミケルが単に仲が悪いというだけには留まっていないように思えた。

「知ってしまったのでしたら、いつまでも隠してはおけないでしょう。鈴様、こちらへ」

ルカはあたしを誰もいない部屋へと案内した。

「これからお話する事は、他言無用にお願いいたします」

なんだか重苦しい空気の中、ルカはミケルについて話始めた。

「ミケル様はアシル様のお兄様です」

いきなりの衝撃事実にあたしは一瞬理解できなかった。

だって、一度だってアシルとミケルが似ているなんて思った事なかったから……。

それにミケルがお兄さんならなぜ年上のミケルが王位を継いでいないんだろう。

「……本当に？」

「はい、ただおふたりは母親が違います」

母親が違うってことは、腹違いの兄弟ってこと？

「アシル様の母君は王妃であるエミリア様ですが、ミケル様の母君は側室のミレーヌ様です」

ルカの話はアシルとミケルが生まれる前へと遡った。

前王セルマと王妃エミリアの間にはなかなか子供に恵まれなかった。

子供がいなければ王家が滅びてしまう。

心配した側近達に言われ前王は側室迎え、その1年後にミケルが生まれた。

これで王家は安泰だと周りかホッとしたのも束の間、王妃の懐妊がわかったのだ。

そして、生まれたのがアシルだった。

前王はアシルとミケル共にとても可愛がっていたという。

しかし、前王が病に伏せるようになると周りがざわつき始めた。

前王が崩御したあと王位を継ぐのは兄であるミケルを押すものと、正室の子であるアシルを押すものとで二分し始めたのである。

内部分裂は国の根幹を揺るがしかねない。

そして、前王が下した判断は正室の子であるアシルが王位を継ぐということだった。

ミケルを王位にと押していた者達は納得出来ないと前王に詰め寄ったが、争いを恐れた前王はミケルの処刑を言い渡した。

ミケル、わずか１０歳だったという。

「ミケル様が生きておられれば、２０歳になっていたはずです」

ミケルが処刑された？

しかも、１０年も前に……。

じゃ、あの人は一体誰？

ミケルの偽者……？

「と、ここまでは古くからいる城の者なら皆知っております。しかし、問題はここからです」

問題……？

「ミケル様の処刑は内密に行われました。しかし、本見届け役の者

が付く事が無かった為、誰もミケル様の遺体を見ておりません」

遺体を見ていない。

それってもしかして、ミケルは生きているのってこと？

「遺体を見ていないミケル派の者は当然納得できず、ある日ミケル様の墓を掘り返した者がいたのです。そして、墓には……」

あたしは息を飲んだ。

真実はどうだったんだろう。

「……子供の遺体があったそうです」

あたしは深く息を吐いた。

そ、そうだよね。

遺体はありませんでしたなんて、そんな都合のいい話は無いよね。

それじゃ、あのミケルは誰なんだろう……。

第２６章

その夜、ミケルと会う為にルクの花が咲いてるあの場所へと行った。

あたしはミケルに会って、何を聞くつもりなんだろ。

会ってどうしたいんだろう。

「やあ」

あたしに声を掛けたのは、ミケルだ。

「来ると思ってった」

考えがまとまらないままのあたしは、何をどうしゃべっていいのかがわからない。

「その顔は、全部聞いたんだろ」

やさしく問いかけるミケルにあたしは頷いた。

「……あなたは、一体誰なの？」

「さぁ……、僕は誰なんだろうね」

ミケルは小さく笑うと夜空を仰いだ。

「僕は望まれて産まれてきたはずだった。だけど、アシルが産まれて状況は一変した。父は僕を可愛がってくれていたけど、周りの見

る目はまるで邪魔者扱いだ。そして、記録上ではもう僕は存在しない」

「お墓にあった遺体は……」

「父は僕の処刑を言い渡す前に信頼のおける部下にあるものを捜させた」

あるもの？

「僕と背格好の良く似た子供の遺骨だよ」

それじゃ、やっぱりミケルはアシルのお兄さんなの。

「僕は処刑される前日に城から逃亡したんだ。そして、ある人の元で暮らし、１２歳の時に放浪の旅に出た」

ミケルから語られる真実はとても衝撃的だった。

自分が生まれ育った場所の追われるのって、どんな気分だろう。

ミケルの今までの人生を思うと、掛ける言葉が浮かばない。

たった１０歳で城を追われたミケル人生は、あたしなんかが何かを言ったところで、空しく聞こえるだけだ。

「自分でも時々わからなくなんだ、何の為に産まれてきたのかって」

そう言ったミケルの表情はなんだか悲しげだった。

「だから旅に出た。自分の居場所を見つける為に」
「それは見つかったの？」
「そうだね……、居場所は見つからなかった。でも、欲しいものは出来たかな」
「欲しいものって？」
あたしの質問には答えず、ミケルは優しく笑顔を向けた。
「ね、鈴。アシルをどうするつもりなの？」
えっ、アシル？
なんでここでアシルが出てくるんだろう。
「老師様の所に行ったり農作業をさせたり、何をしようとしているの？」
「アシルに一般的な暮らしを少しでも知ってもらえたらって思っただけで……、別に具体的な目標があるわけじゃない」
なんでそんなことを聞くんだろう。
「君はアシルの花嫁になるつもり？」
「まさか、アシルと結婚なんて考えたこともない」
ミケルは少し考えてから口を開いた。

「アシル何かさせようとしても無駄かもね」

え、それってどうゆう事？

そして、ミケルはあたしの耳元にそっと囁いた。

「身辺に気をつけて」

第２６章（後書き）

ご愛読ありがとうございます。
申し訳ありませんが、次回からの更新を不定期にしますので、よろしくお願いします。

第27章

『身辺に気をつけて』

ミケルにそう言われて1週間経った。

湯浴みも終え、カリナが用意してくれていたお茶を入れ長椅子に座った。

身辺って言われてもなぁ……。

その言葉の意味を考えていたがよくわからない。

まさか、歩いていたら上から植木鉢が落ちて来るとか、そんなオーソドックスな事じゃないよね。

実際この1週間、特に何ごともなく過ごしていた。

一体どうゆう意味だったんだろう。

あたしは一口お茶を飲んだ時、乱暴に扉を叩く音がした。

こんな夜に誰だろう。

あたしは警戒心を持ちながら扉に近づき、そっと扉を開いた。

すると、そこに居たのは意外にもアシルだ。

アシルはあたしに断る事も無く部屋へと入ってきたが、心もとない

足取りで長椅子に座ると、手に持っていた瓶を一口飲んで前にあるテーブルに置き、くつろぎ始めた。

どう見てもいつものアシルと違う態度にあたしは戸惑いを感じ、あたしはゆっくりとアシルに近づくとアシルからアルコールの匂いがした。

テーブルに置かれた瓶を手に取り、匂いを嗅ぐと予想通りお酒だった。

アシルの様子からすると、ここに来るまでにかなりの量を飲んでいるようだ。

「ね、ここが何処だかわかってんの？」

するとアシルはクッと笑った。

ここって笑う場面じゃないんですけど……。

「もちろん。未来の花嫁の部屋だろ」

未来の花嫁って……。

ああ、酔っぱらいってホント、予想外な言動や行動をとる事があるよね。

「酔っぱらいの相手をするほど、あたしは暇じゃないんだけど」

あたしはアシルの言葉に苛立を感じた。

アシルとは街に置いてひとりで帰って以来まったく音沙汰のなかったのだ。

こんな風に酔っぱらっているところを見ると、あの時あたしの言った言葉は真剣に受け取られていないのだと思った。

アシルに期待したあたしがバカだったのかも。

最近のアシルの態度が柔軟になったことで、少しでも期待した自分が情けなくなる。

所詮、人の上に立っている人は、底辺にいる人の事なんてどうでもいいのかもしれない。

「俺は、不甲斐ない王だ」

今さら何を言ってんのよ。

すでに、あたしはアシルの言葉に反論する気にもならなくなっていたあたしは言葉を返す気にもならない。

「この国の王でありながら、政治に口を出す事が出来ないなんてな」

一瞬あたしは耳を疑った。

「……今、何て言ったの？　政治に口を出せない……？」

「あぁ」

「それってどうゆうこと！」

詰め寄ったあたしにアシルはフッと笑った。

「言葉通りの意味だぜ」

「その意味がわからないから聞いてんじゃない！　ふざけないでちゃんと答えなさいよ！」

アシルは酒瓶を手に取り一口飲むと左手で口元を拭うと、真剣な面持ちで話し始めた。

「俺が即位したのは８歳の時だ」

そういえば、ミケルがこの国を出てその後を追うように前王が亡くなったって言ってたっけ。

「８歳のガキにこの国の行く末を任せられると思うか？」

「それは……、無理でしょうね」

「そう、８歳の俺にはこの国を動かすことなんて出来ない。だから後見人がついた」

「後見人？」

「政治のわからない子供の俺に代わって国の政治を動かしてくれる人だ」

８歳の子供に国の政治をさせるのは確かに無理だ。

後見人がつくのは当然といえば当然の事だけど、それとアシルが政治に口を出せないのとどう関係があるんだろう。

「俺はそれ以降、一度も政治に関わってこなかった」

「じゃ、今は誰がこの国を動かしているの？」

「後見人のエルマー・ダンバー、俺の伯父だ。政治を任すのに１０年は長過ぎた。すでにこの国でのエルマーの力は想像以上になっている。そして、自分の力を維持する為に、俺に政治に関わらせてこなかった。実際、税金についての話をしたら、取り合ってもらえなかった」

それがやけ酒の原因か。

「だったら、あんたが一言クビにしてしまえば事はすむ事じゃないの？」

そうよ、いくら政治に関わってこなかったからって、この国の王なんだからそれぐらい簡単でしょ。

「無理だな。後見人が政治を降りる時は、俺が成人の歳である１９の時もしくは伯父が失脚した時だ」

アシルが即位して１０年ってことは、今１８だから……。

「あんたが１９歳になるまであと１年。だったら、１年後にその伯父さんから政権を返してもらったらいい話じゃないの？」

「１年……、それまでこの国は保たないだろう」

第２８章

あたしは小さく溜め息を吐いた。

なぜ、そんな事になる前に対策をたてなかったのだろう。

「じゃ、それ以外に政権を取り戻す方法は？」

「俺が結婚する事。結婚することで１９歳を待たなくても成人と認められる。だけど、あの伯父のことだ、自分の息のかかった女を俺にあてがうつもりだったと思うぜ」

「ね、ひとつ聞いていい？」

あたしはアシルが座っている長椅子のすぐ横に座った。

「あんたはこの国を本気で変えたいと思っている？」

「当然だろ」

「じゃ……、なんであたしがこの国に来た時、結婚を拒んだの？この国の政権を取りたいなら例え政略結婚でもするべきだと思わなかったの」

アシルは長椅子の背もたれに背を預けた。

「お前は俺と結婚する事がどうゆうことか、わかって言っているのか。政権を取られそうになった伯父は何をするかわからない」

「……命の危険があるってこと……？」

「……そうゆうことだ」

「じゃ、あんたがあたしとの結婚をしたがらなかったのは、あたしの事を心配しての事だったの……」

アシルは黙ったまま答えようとしない。

あたしはクスッと笑った。

「何がおかしいんだ」

「あんたって素直じゃないね。それなら回りくどい事しないで、最初からそう言えばいいのに」

アシルは長椅子の肘掛けに頬杖をついた。

「お前をこの国に連れてきたのは長老達が寄り集まって考えた悪知恵だ。俺が何を言っても聞くものか。それよりお前が嫌だと言って故郷に帰ると言い出す事が一番手っ取り早いと思ったんだよ。それを、ことごとくはね除けやがって」

そう言っているアシルは、なんだかいたずらがうまくいかなかった子供のように見えておかしかった。

これが本来のアシルなのかもしれない。

「たまに話に出て来るけど、長老って？」

「前王の側近達だ。政権が変われば側近達も代わる。今は権力は無

いが一筋縄ではいかない連中だ」

それにしても、まさかアシルが政治に関わっていないとは思わなかった。

あたしは長椅子の背もたれに背を預け天井を仰いだ。

この状態じゃますます元の世界に帰る日が遠のいた気がする。

あたしは小さく溜め息を吐いた。

今のあたしに出来る事ってなんだろう。

「せめて学校だけでも作る事ができたらな」

「学校……？」

ボソッと呟いた言葉をアシルが聞き返した。

「そう、学校。歳の近い子供達を集めて読み書きや数の数え方を教える場所。この前、農作業を終えて帰る途中男の子がお店の人に騙されていたでしょ。それって、ちゃんと教育が行き届いてさえいればあんな風に騙される事も無くなるんじゃないかなって思ってたんだ」

アシルはあたしをジッと見たまま何も言おうとしない。

「な、何……」

「お前ってホント、不思議な女だな」

そう言って笑ったアシルの笑顔にあたしはドキッとした。
今までアシルの笑顔は何度か見たけど、ロウソクの明かりだけで見るととても魅力的に見え、あたしは意識的に目線を外した。
この前からそうだ、アシルといると時々心臓の鼓動が早くなる。
「お前は諦めるという事をしないんだな。正直、今回は伯父にかなり詰め寄ったんだが、うまくいかなくて、へこんでたんだ」
アシルは悔しそうに話した。
今まで王としての責務を果たしていないと思っていたけど、アシルはアシルなりに頑張っていたんだね。
それを知らずにあたしはただアシルを責めていただけのような気がした。
「あたし、あんたが政権を取り戻せるように協力する。だから、あたしに出来る事があったらなんでも言って」
あたしはアシルの手を握りそう言うと、アシルは少し驚いた表情をしていたが、やがてニヤリと笑いあたしの手を握り返してきた。
「なら、さっさと婚儀を挙げるか？　そうすれば話は即解決だ」
そう言ってあたしに近寄ってきたアシルに対し、あたしは反射的に少し退いた。

「べ、別に結婚するのはあたしじゃなくてもいいんでしょ。あんたには他に沢山いるじゃない」

あまり近寄らないで欲しい。

心臓の鼓動が少しずつ早くなっていくのを感じる。

「俺に寄って来る女は王という地位に興味があるだけだ。俺自身に興味があるわけじゃない」

アシルは少しずつ近寄って来る。

あたしは長椅子の端まで来てしまい、これ以上退くことができない。

「だからって、結婚っていうのは時期早々だと思うけど……、だって、ほら、あたしはそのうち元の世界に戻っちゃうし……」

その言葉にアシルはあたしに近づくのを止めた。

「それなら……、このままここに留まるという選択肢はないのか」

元の世界に戻らず、この世界留まる……。

考えてもいなかった事を言われ、そんな選択肢もあったのかと思った。

だけど……。

アシルはさっきとは違い真剣な眼差しであたしをジッと見つめている。

「……無理だよ。あたしは、この世界の人間じゃない」

そう、あたしの生活の基盤の全ては、元の世界にはある。

「そう……、か……」

そう言って笑ったアシルの笑顔に一瞬寂しげな表情に見えたのは気のせいだろうか。

アシルはあたしに顔を近付けるとそっと頬にキスをし、お休みを言って部屋を出て行った。

そしてあたしの心にアシルの寂しげな表情がチクリと刺さった。

第２９章

あれから3日、あたしはいろいろな事が頭の中に浮かび上がりそして消えていく。

あたしはいつになったら帰れるのか。

アシルに政権を取り戻す為にはどうすればいいのか。

アシルが結婚するのが一番手っ取り早い、それはわかるけど……。

あたしの脳裏にアシルが最後に一瞬見せた寂しげな表情が思い浮かぶ。

なんでアシルのあの表情が忘れられないんだろう。

なんだか胸が切なくなる。

その時、扉をノックする音がしカリナが顔を出した。

「エルマー様が鈴様とお会いしたいと言っておりますが」

エルマーってたしかアシルの伯父で後見人の人。

あたしと会いたいなんて、なんでだろう。

しかし、断る理由も無かったあたしは、会いに行くことにした。

カリナの案内で城の奥まった部屋へと入ったが、エルマーはまだ来

ていない。

あたしは椅子に座り、エルマーが来るのを待っていたがなかなか姿を現れない。

あれ、なんの匂いだろ。

部屋に入った時には気がつかなかったけど、鼻をくすぐる様な、でもけして嫌な匂いではない。

辺りを見渡すと、壁際の机の上にある陶器の置物から微かな煙が出ている。

お香……。

そういえばあたしもよく部屋でお香をやっていたことを思い出した。

この香り、なんだかとってもフワフワとした気分になる。

少しの間お香の香りに浸っていると扉がノックされ、中年の男性が側近らしき人を従えて入ってきた。

「呼び出してすまなかったね。私はエルマー・ダンバーだ」

エルマーは白髪交じりの、おじさんというよりはおじ様という呼び方がとても似合う紳士的な人だった。

挨拶した時の笑顔は、初対面で好印象を与える。

その笑顔にあたしはつられて笑顔で自己紹介をすると、エルマーは

あたしの顔を見ると驚いた顔をした。

「君は本当に伝説の女性と言われる容姿をしているんだな」

「……どうゆう意味ですか？」

「いや、気を悪くしないでくれ。黒い髪に黒い瞳。そんな女性がいるとは思わなかったものでね」

その口調は最初の印象とは違い、なんだかとても皮肉に聞える。

「早速だが、君は自分国に帰りたいと言っているそうだな」

「……はい」

あたしの返答にエルマーは満足そうに頷いた。

「そこでだ、君を元の世界に返してあげようかと思ってね」

エルマーの意外な申し出に驚いた。

「あたし、帰れるんですか」

「私は以前から君の意思とは関係無くこの国に呼んだ事を、心苦しく思っていたんだよ。この者はチェスターと言って、この国でも指折りの術師だ。この者なら君を元の世界へ帰す事が可能だろう」

元の世界へ帰れる。

あたしにとってとても魅力的な話だった。

だけど、なぜだろう、何かが引っ掛かる。

「でも、あたしを呼んだ術は呼んだ本人でなければ元の世界へは返せないと聞きました」

優しい笑顔をあたしに向けているエルマーにどうしても違和感を感じる。

「それは嘘だよ」

「嘘……」

「あぁ、君をこの国にとどめておく為の嘘だ。どうしても君を伝説の女性に仕立てあげたかったのだろ」

なんだろう、この違和感は……。

あたしは真直ぐエルマーを見た。

あぁ、そうか。

この人、目が笑っていないんだ。

優しい笑顔の下で目だけがとても力強く、人にノーと言わせない意思が潜んでいる。

元の世界に帰りたい、その気持ちはもちろん今でも変わらない。

でも、あたしは……。

「お話は有り難いのですが……、ご遠慮致します」
すると、エルマーは笑顔のまま目の奥が更に力強くなった。
「なぜだね？　君にとって良い話だと思うが」
「ええ、確かにうれしいお話なんですが……」
あれ、なぜだろう視界がぼやける。
あたしは手で目を擦った。
しかし、ぼやけた視界は直らない。
「どうされました？」
大丈夫、そう言おうとしたが今度は目眩が襲ってきてあたしは近くの机に手をついて体を支えた。
あたし、どうしたんだろう。
目眩はどんどんひどくなる一方だ。
そのうち立っていられなくなり、あたしはその場に崩れ落ちた。
そのうえ、体を動かそうとしても体が痺れて動かす事どころか、声さえも出ない。
「ようやく効いてきたようだな」

エンバーはあたしに近づき上から見下ろした。

「素直に帰ってしまえば良いものを。まったく、アシルに余計な事を吹き込みおって」

ぼやけた視界ではエンバーの表情はわからないが、最初の時とは違いとても冷たい声だ。

あたしこのままどうなっちゃうんだろう。

『身辺に気をつけて』

ミケルの言葉を無情にも思い出す。

そっか、ミケルはこれを言いたかったのかもしれない。

「娘、帰ると言わなかった事を後悔するんだな」

そしてあたしの意識は暗闇へと落ちていった。

第３０章

目が覚めるとそこは、自室のベッドの上だった。

日はすっかり落ち、部屋には明かりが灯されている。

あれは……、夢……？

あやふやな記憶のなか、体を起こそうとするととても重く感じられ、まるで、長時間激しい運動をした後のようだ。

しかし、それがあの出来事が夢でなかった事を認識させられ、背筋がゾッとした。

あれは夢なんかじゃない現実だ。

あたしは重い体を無理矢理起こした。

体は重いけど、どこか怪我をしているわけじゃない。

一体あれはなんだったんだろ。

目が霞むと思ったら、急な目眩。

体調はけして悪くはなかったはずなのに……。

その時、バルコニーの窓を叩く音がした。

バルコニーの窓を叩く人はひとり、きっとミケルだ。

あたしは重い体を引きずるようにして、バルコニーに出た。

「やあ」

「どうしたの？」

ロウソクの明かりだけではわからなかったけど、ミケルの顔がぼやけて見える。

「しばらく会えなくなるから、会いにきた」

「どこか行くの？」

「うん、欲しいものを手に入れに」

「そう……、手に入れられるといいね」

なんだか立っているのが辛い……。

「鈴？」

あたしの異変に気付いたミケルが顔を覗き込んだ。

「ねぇ鈴、僕の顔がちゃんと見えてる？」

「大丈……」

しかし立っていられなくなったあたしは、言葉が言い終わらないうちにミケルに寄りかかってしまった。

ミケルはあたしを受け止めるとそのまま抱き上げ、部屋へと入ると、そっとベッドへと寝かせてくれた。

「指、何本に見える？」

「３ぼ……、４本かな」

ミケルはあたしの目の前に指を出し、あたしが答えると小さく溜め息を吐いた。

「鈴、今日何か変わった香りを吸ったりしなかった？　たとえば……、体がフワフワするような感じのするものとか」

そういえば、エルマーと会った部屋にお香があったっけ。

「……お香のこと？　それなら今日エンバーと会った部屋に置いてあったよ」

「やっぱり……、もう二度とその香りは吸ってはいけないよ」

「なんで？　いい香りのお香だったよ」

「君の体調不良の原因はその香りだ」

思ってもみない言葉にあたしは心底驚いた。

あのお香が……？

「君が吸った香りはラギィの実と言って、術師がよく使う物だ。初

めてそれを沢山吸うと最初は心地よくなるが、だんだん目がかすむようになり目眩がし体が思うように動かなくなる」

あたしがあの部屋で感じた体の異変そのものだ。

「周りから見れば単なる体調不良に見えるけど、最大の特徴は瞳孔が開くから目を見ればラギィを吸ったんだということがわかる」

どうしてそんな物を使う必要があったんだろうか。

「ラギィの実のはね、煙を吸った人を術師が暗示をかけ思い道理に動かす事ができるんだ。だから、ほとんどの国が禁止されている。もちろんこの国でも」

思い通りに……。

卑怯だ！

自分の思い通りにいかない人間は、そんな物を使ってまで思い通りに動かそうとするなんて。

恐怖より先に怒りが込み上げてきて、初めて人を許せないという感情があたしの心を支配した。

「エンバーはああ見えても術師の心得があるから気をつけた方がいい。もし、もう一度ラギィの実を吸うような事があったら決して相手の目を見てはいけないよ。見てしまう事で暗示にかかってしまうから」

「もし、暗示にかかってしまったら？」

ミケルは目を伏せしばらくしてからゆっくり目を開いた。

「逃れることは……、ほぼ無理だろうね」

逃れる事が出来ないのなら、あたしはこれからどうすればいいの？

エンバーと会う事を避けながら過ごしていかなければいけないのだろうか。

「もし……、君の精神力が強ければ……、相手の暗示に対して決してかからないという強い意思があれば逃れる事は可能かもしれない。だけど、それは自分自身とのとても辛く苦しい戦いになる」

精神力……。

『帰らなかったことを後悔するんだな』

そう言っていたエンバー。

その言葉が、きっとこのままでは済まないだろう事を物語っている。

もしエンバーと会った時、あたしはエンバーにそして自分自身に勝つ事ができるのだろうか。

大きな不安が押し寄せてくる。

「少し待ってて」

ミケルはそう言うと部屋を出て行き、1時間程して戻ってきた。

「後遺症は無いけど、初めてラギィを吸った人は2、3日は体が思うように動かないだろうから、この解毒薬を飲めば少しは楽になるよ」

ミケルはあたしに3錠の丸薬を差し出した。

「ありがとう」

丸薬を受け取るとミケルはあたしの体を起こしてくれ、水が注がれたコップを持ってきてくれた。

あたしは丸薬を口の中に放り込み水を全部飲み干し、再び横になった。

「ゆっくり休むと良い。鈴が眠るまでここにいてあげるから」

ミケルをそう言ってあたしの手を握ってくれた。

それは、不思議と気持ちが安らぎあたしは眠りに落ちた。

第３１章

目が覚めるとすっかり日が昇っていて、部屋を見渡すとすでにミケルの姿はなく、体を起こすと昨日の体の重さが嘘のように軽くなっていた。

ミケルから貰った丸薬が効いたのかな。

朝食を終えて、あたしが部屋でのんびりと過ごしていると扉がノックされ、カリナが扉を開けるとそこにいたのはアシルだった。

「出かけるぞ」

アシルは部屋に入るなり突然そう言い出した。

「出かけるって……、どこへ……？」

「行けばわかる。馬屋で待っているぞ」

それだけを言うとさっさと部屋を出て行った。

一体どうしたんだろう。

疑問に思いながらもあたしは手早く出かける用意をし、馬屋へ向かった。

「遅い！」

自分が突然呼び出しておいて遅いと言うのはずいぶん勝手だな。

まったく、女の子は用意に時間がかかるっていう事をまったくわかっていない。

心の中で文句を言いながら、あたしは馬にひとりでは乗れない為、アシルの馬に一緒に乗せてもらった。

いつもなら馬に乗る時はルカに乗せてもらっていたけど、いつもと違う相手になんだか緊張してしまう。

しばらく馬を走らせ、あたし達は街中を抜け少し小高い丘へと着いた。

あたしは馬から降りると辺りを見渡したが、少し開けた丘と周りに林があるだけで、他には何も無い。

「ここは？」

「ここにお前の言っていた学校というものを作ろうと思う」

驚いてアシルを見ると、アシルは悪戯っぽく笑った。

「いくら政治に関わっていないとはいえ、これぐらいの事をするだけの権力はあるぜ」

あたしはただただアシルを見つめていた。

だって、学校があればとは言ったけど本当に現実になるとは思わなかった。

しかもこんなにも早く……。

「どうした？」

「まさか……、ホントに作る事になるとは思わなかったから……」

「この国の状況を長老達に聞かされたのは1年前だ。王位に就いてからほとんど城から出る事の無かった俺はそれほど深刻に事を受け止めていなかったが、ある時ルカと一緒に城を抜け出して街を見に行った時、俺は愕然としたよ。幼い頃に見た街はもっと活気があったのに、今じゃ一変してしまった」

アシルは悲しそうに下を向いた。

「俺は心底後悔したよ、今までなぜ政治を任せっきりにして関わってこなかったのかと」

「関わってこなかったって言っても、王になったのは8歳だって言ってたでしょ。どうにかしたいって思ってもどうにもならない事ってあるよ」

今だってアシルは18歳だ。

あたしが18歳の時って、友達とバカな話をしたりしてただ毎日を過ごしていただけだったような気がする。

国の事や政治の事なんて考えた事もなかったのに、アシルはすでに国を背負っている。

それがどれほど大変なことなのか、あたしには想像もつかない。

「以前お前と行った農村で農作物が横流しされている話、覚えているか？」

「うん」

「あれからルカに調べさせた結果、エンバーが関わっているらしい」

エンバー……。

その名前を聞くと腹立たしさを覚える。

「しかし、どうしても証拠が掴めない。証拠さえあればエンバーを失脚させる事ができるんだが……」

アシルが悔しそうに言った。

「頑張ろう！」

最初は嫌なヤツだと思っていたけど、アシルはちゃんとこの国の事を考えている。

学校のことだってそうだ。

いくら王だからって、こんな短期間に物事を決めるのはきっと大変だったはずだ。

そんな真剣な思いをあたしは応援してあげたい、そう思った。

「あきらめちゃダメだよ。悪い事をしているヤツは絶対どこかでボ

ロがでる。今のあんたならきっと出来るよ。あたしも、出来る事は協力するからさ」

アシルはジッとあたしの顔を見た後、フッと笑った。

「お前ってホント、規格外だな」

そう言ったアシルはいきなりあたしを抱き寄せた。

えつ！　何？

アシルの吐息が耳元で聞こえてくる。

あたしはアシルの腕の中にすっぽり包まれ、自分の鼓動が早くなるのを感じた。

「城を出てから何者かにつけられている」

えっ……？

耳元でアシルが囁いたその言葉であたしの中で緊張感がはしった。

「俺が合図したら林の中へ逃げるぞ」

あたしは小さく頷いた。

「行くぞ！」

アシルはあたしの手を取り林へと走った。

第３２章

林の中をしばらく走り、大きな幹の影に隠れるとしばらくして声が聞こえてきた。

「どこへ行った！」

「逃がすな、捜せ！」

男達はあきらかにあたし達を狙っているようだった。

なんであたし達を……？

「くそっ！　ただの物取りじゃなさそうだな」

アシルが険しそうな顔で言った。

ただの物取りじゃなかったらなんだっていうのよ。

すると木の影からガラの悪いひとりの男が出てきてあたし達の方を見ると、男は下品にニヤリと笑いいきなり襲いかかってきた。

アシルはすかさず剣を手に抜き、剣と剣が交わる音が響いた。

しかし剣の腕はアシルの方が勝っており、３度剣が交わった後、アシルは男の喉を切り、男は血飛沫をあげてその場に倒れみ、大量の血を地面に流しならしばらく苦しそうにもがいた後、動かなくなった。

……死んだ……の？

あたしはその様子とただ呆然と見ていた。

するとアシルは男から剣を取り、それをあたしに差し出した。

「持ってろ」

「な、なんでそんな物……」

「敵はまだ俺たちを捜している。相手が俺達を捜して分散している時に片付けておく」

「だからってなんであたしが険なんか……」

持たされた所であたしに人を切れる訳ないじゃない！

「護身用だ。何かあった時、死にたくなければそれで身を守れ」

何かあったときって何よ！

しかし、死というものを目の前で見せられたあたしは、剣を手にする意外選択肢がなかった。

「ここを動くなよ。すぐ片付けてくる」

えっ！

一緒に居てくれないの！

こんな状況でひとりにされたら不安じゃない！

離れていこうとするアシルの服をあたしは思わず掴んでしまった。

アシルはあたしの方を振り向くと優しく笑った。

「大丈夫、お前の事は俺が守る。だからここで大人しく待ってろ」

そう言ってアシルはあたしをそっと抱き締めると、もと来た方向へと走って行った。

その場に残されたあたしは剣の柄を握りしめ立ち尽くしていた。

チラリと目線をやるとそこには死体がひとつ。

一体これはどうゆう状況なのよ！

あえないっ！

出来たての死体がすぐ近くにあるなんて……、しかもここから動けない。

あたしはだんだん泣きそうになってきた。

なんであたしがこんな目にあわなきゃいけないの。

もう嫌だ！

誰もあたしの所には来ませんように。

しかし、その願いは無情にも神様は聞き入れてはくれなかった。

「ここに隠れていたのか」

声のする方へと目線をやると、大柄な男が立っていた。

どうしよう、見つかっちゃった……。

あたしは汗ばんだ手で剣の柄を握り直した。

「女を殺すのは俺の趣味じゃねぇが、今回ばかりは大金が貰えるんでな、悪く思わないでくれよ」

男はそう言うとあたしに向かって剣を振り下ろしてきた。

反射的に握っていた剣で受け止めると、男は迷わずもう一度剣を振り下ろした。

あたしは二度目もかろうじて受け止めると、男は剣を交えたまま今度は力づくで押してきた。

女のあたしが男の力に勝てる訳も無く、必死に力を入れても押される一方だ。

このままでは本当に殺されてしまう。

どうしよう。

どうしたらいいの。

ああ、ハタチという短い人生をこんな異国の地で終えてしまうのだろうか。

本気で死を覚悟した時、男が短くうめき声を上げると急に力が抜け、その場に膝をついて倒れていく。

そして倒れた男の後ろにいたのは、アシルだ。

「遅くなった」

た……、助かった……。

あたしは力尽きたようにその場に座り込んだ。

「おい！　大丈夫か」

アシルは座り込んだあたしの前に膝を着くと、心配そうにあたしの顔を覗き込んだ。

しかし、あたしは返す言葉が出てこない。

それどころか無意識に体が震え始めた。

目の前の死体。

初めて人と交わした剣。

そして、本気で死を覚悟したあの瞬間。

震えと共に目から涙がこぼれ落ちてきた。

そんなあたしをアシルはそっと抱き締めてくれ、あたしは今さっきまで感じた恐怖を吐き出すかのようにアシルにしがみつき声を出して泣いた。

怖かった。

死を感じたときの恐怖は言葉ではいい表すことなど出来ない。

そして、二度と味わいたくないと、心底思った。

アシルはあたしが泣き止むまでずっと抱き締めていてくれ、落ち着きを取り戻すとアシル親指でそっと涙を拭ってくれた。

「怖い思いをさせたな」

あたしは小さくクビを左右に振った。

あたし達はその場を後にし、丘に置いてきた馬まで戻った。

そして気になったのは襲ってきた男の言葉だ。

『大金が貰える』

あたしを襲った男は確かにそう言った。

大金……、その言葉の意味は考えなくても明らかだ。

誰かがあたしを殺そうとしている。

そして、その誰かとは……エンバー……。

『帰ると言わなかった事を後悔するんだな』

その言葉が今、現実になった。

あたしを殺せなかった事をエンバーが知ればまた同じ事が繰り返される。

あたしはそれを黙って受け入れるしかないのだろうか。

嫌だ！

殺されるかもしれない、そうおびえて暮らすなんて絶対嫌だ。

それならいっそのこと……。

第３３章

「お久しぶりです。エンバー様」

あたしは部屋の客間にひとりで入ってきたエンバーに、ニッコリ笑って挨拶をした。

「わざわざお越し頂きまして、ありがとうございます」

「話とはなにかね」

「立ち話もなんですから、お座りください」

エンバーが長椅子に座るのを確認してからあたしは椅子に座った。

「先日は大変失礼を致しました。何分突然のお申し出でしたので、早々に答えを出してしまった事を反省しております」

「ほぉ、素直に帰る気になったか」

あたしはカリナが用意してくれていたお茶をカップに注ぎ、エンバーに差し出した。

「帰りたいのはやまやまですが、お婆はまだあたしを帰す気がまったくないようで、困ったものです」

あたしは落ち着いた口調で言った。

「それで、わたしに帰して欲しいと言いたいのかね」

エンバーは満足そうな表情をしている。

「いいえ」

あたしは軽くクビを横に振った。

「最近はこの世界に居てもいいんじゃないかって思い始めているんです。元の世界に戻ってもあたしはただの一般市民に戻るだけ。それはあまりにつまらないと思いませんか？」

「……」

「この国へ来て思ったんです。ただの一般市民に戻るよりアシルと結婚した方がより贅沢な暮らしが出来るのではないかと。……ところで、エンバー様はアシルの後見人だそうですね。しかし、アシルが成人するかもしくは結婚すると王からの要請がない限り、政治には一切関わる事ができないとか」

あたしの言葉にエンバーは微かに険しい表情をした。

「……確かに、後見人とはそうゆうものです」

あたしは緊張で喉が渇いている事を悟られないように、ゆっくりとお茶を飲んだ。

そう、これはあたしの一世一代の大勝負。

エンバーに殺されると怯えて暮らすぐらいなら、いっそこっちから仕掛けて不正の事をエンバーの口から話させてやると決めたのだ。

そして、ラギィの実を炊かれないよう自分の部屋へとエンバーを呼び出した。

「もし……、エンバー様がアシルの後見人でなくなったら……、さぞお困りでしょうね」

「……何をおっしゃりたいのか、よくわかりませんね」

用心深くエンバーはあたしを見ている。

「後見人という立場を利用して、ずいぶん甘い蜜を吸われたのでは？」

エンバーは小馬鹿にしたように笑った。

「何を言うのかと思えば、くだらん」

「本当にくだらないとお思いですか？」

あたしはわざとけしかける様に言った。

「あなたが築いてきた今の生活は、アシルの後見人であってこそ。そうでなくなったあなたになんの魅力があるのでしょうね？」

「貴様はわたしを侮辱する気か！」

「侮辱だなんて、ただ真実を述べたまで」

「話にならん！　失礼する」

「アシルはあなたを調べ始めていますよ」

エンバーは勢い良く立ち上がったが、あたしがそれと同時に発した言葉で、それ以上動く事はしなかった。

「ずいぶん巧妙にされているようで、なかなか証拠が掴めないと言っていましたが、いずれあなたにたどり着くでしょう」

エンバーの顔色が変わった。

あたしを警戒し、どこまで知っているのかを探るような目をしている。

「今のアシルならあなたよりあたしの言葉を重要視するでしょうね。なんと言っても、今のアシルはあたしに夢中ですから」

あたしは不敵に笑ってやった。

「ご存知でしたか？　学校を造りたいと言い出したのも、あたしの助言があったからだって」

「……なにが言いたい？」

エンバーは座っているあたしを上から睨みつけた。

「あら、わかりませんか？　お互いの利害関係が一致しているのが。あたしはここで快適な暮らしをしたい。でもそれに見合うだけの収入もなければコネもない。あなたはアシルの後見人でなくなれば今の地位を失う。新たにアシルの花嫁を連れてくるより、あたしを利用した方が手っ取り早いと思いませんか？」

あたしは座ったままゆっくりとエンバーを見上げた。

エンバーは黙ったまま思案しているようだった。

思案しているということは勝算はあると踏んだあたしは、畳み掛けるように条件を提示した。

「あたしがアシルと結婚したなら、エンバー様の事を詮索しないようにさせましょう。そして、後見人を降りた後もしかるべき役職に就ける様に言えば、あなたは今の生活を維持する事が可能なはずです」

「……」

「そのかわり……、作物を国外へ流すルートをひとつあたしに。もちろん多少の贅沢が出来る程度で構いません。あなたにとっては微々たるものでしょう」

すると、エンバーは突然笑い出した。

「ずいぶん大きく出たものだ。このわたし相手に取引をしようというのか。……とんだメギツネだな。……いいだろう、お前にサレーヌ国へのルートをやろう」

「サレーヌ国……」

「そうだ。セルビィの果実が高値で売れる国だ。お前の言う贅沢な暮らしをしていくには十分な金が入るルートだ。ただし、それにはわたしへの忠誠心を見せてもらおうか」

エンバーは懐から布に包まれた何かをあたしに渡した。

「そこまでだ」

そう言って隣の部屋から出てきたのはアシルとルカ、そして待機していた兵士達だ。

「あなたの口から不正の事実を聞く事になろうとは」

エンバーはアシルを見て目を見開いて驚き、あたしを睨んだ。

あたしは立ち上がり、負けじとエンバーを睨み返してやった。

「あたしは不正に手を染めるほど腐った人間じゃないんでね、おあいにく様。素直に捕まることね」

ついにやってやったと、あたしは心の中でほくそ笑んだ。

「小賢しい真似ををしおって。やれるものならやってみるかいい」

アシルは兵にエンバーの周りを囲む様に指示した。

エンバーは追い込まれたとは思えないほど落ち着き、あたしと目を合わせると不適に笑ったその時、あたしの頭の中で何かが聞こえた。

頭が痛くなり、あたしは右手でこめかみを押さえた。

この感覚どこかで覚えがある気がする。

そして、あたしの頭の中で聞こえてくる声は段々と鮮明になっていく。

『……ヲコロセ』

なに、これは……？

様子のおかしいあたしに気付いてアシルが近寄ってきた。

「どうした？」

頭の中の声はまだ聞こえる。

『アシルヲコロセ』

『アシルヲコロセ』

この声は何処から聞こえてくるの？

エンバーは勝ち誇ったように、面白そうにあたしを見ている。

ま……さか……。

でも、ラギィの実はここにはないはず……。

あたしはハッと気付いて握りしめていた掌を開くと、そこからはさっきエンバーから渡された布に包まれたものが落ちた。

もしかして、これって……。

第３４章

するとエンバーはニヤリと笑った。

「バカな娘だ。ラギィの実は煙だけが効果を示すものではない。粉を吸っても十分煙としての役割は果たせる。さぁ、さっきわたしが言った忠誠心を十分に見せてもらおうじゃないか」

はめられた。

もしかしてエンバーの目的は最初からこれだったのかもしれない。

自分の部屋だからと、油断していた。

『アシルヲコロセ』

いや、いやだ！

しかし、声に逆らえば頭痛は頭が割れる様にひどくなり、あたしは両手で頭を抱え込みその場に座り込んだ。

「どうした、大丈夫か」

アシルが心配そうに声をかける。

自分のなかの意識が少しづつ遠のいていくような感覚に襲われる。

まるで自我を暗闇に押し込めていくように。

「あたしに、あたしに近づかないで！」

あたしはアシルを自分から遠ざけようと両手で押しのけた。

アシルは驚いたようにあたしを見ている。

しかしそんな悪あがきも空しく、あたしの意思とは関係なくあたしはアシルに近づき、アシルの腰にある剣を抜き取り立ち上がった。

ダメだ！

このままじゃ本当にあたしはアシルを殺しかねない。

意識が遠のく中ミケルの言葉が浮かんだ。

『相手の暗示に対して決してかからないという強い意思があれば逃れる事は可能かもしれない』

決してかからないという強い意思……。

出来るだろうか、あたしに……。

自分の意識が無くなってしまうまえに。

あたしは刃を下に向け両手で柄をしっかり握ると、アシルの方に剣を振り上げた。

アシルは自分へと向けられた剣を見て、どう対応するか判断しかねているようだ。

そしてあたしは無くなりつつある自分の意識に集中し、剣を勢いよく自分の左の太ももへと突き刺した。

一気に痛みが体中を走り、立っていられなくなり庇う様に右膝を床につけ体を支えた。

周りは一瞬なにが起こったか理解出来ないようだったが、最初にアシルの声が部屋に響いた。

「何やってんだ！」

アシルは慌ててあたしの太ももに刺さった剣を抜き、自分の服を引きちぎりあたしの左ももへと巻き始めた。

意識が無くなりそうだったあたしは、左ももへ剣を突き刺したことで一気に本来の自分を取り戻し、エンバーを下から睨んだ。

「あたしは……、あんたなんかに負けない！」

あたしの必死の迫力に、エンバーは一瞬たじろいだが、懐から短剣を取り出し、一気に周りに緊張が走った。

「悪足掻きはお止めになったらどうですか？」

急に掛けられた言葉に、部屋にいた全員が扉から入ってきた人物に視線が注がれた。

「おお、ミケル来てくれたか。早くここから逃げられるようにしてくれ」

エンバーは喜んでいるような、そしてすがるようにミケルに訴えた。
なぜ、ミケルが……。
もしかしてミケルがエンバーとグルだったの？
ミケルは全員から注がれる視線をまたく気にすることなく、エンバーに近づきやさしく笑いかけた。
「聞こえなかったのですか？　悪足掻きは止めろと言ったんです」
その言葉にエンバーは一転、険しい表情をした。
「裏切る気か！」
「裏切るだなんてとんでもない。ボクは最初からあなたを仲間だなんて思った事はありませんよ」
「な……に……？」
「不正が明るみになり追われる立場になって、価値のなくなったあなたを庇う気はさらさら無いと言っているんです」
「……」
みるみるエンバーの顔がこわばっていく。
「自分の思い通りにならなくなったアシルを殺して、ボクを王位に即かせようとこの国へ呼び戻したんでしょうが、残念ですね。僕は

あなたに利用される気はまったくない。それどころか、僕に利用された事もわからないなんて、哀れだね」

ミケルはからかうように軽く肩をすぼめた。

「……おのれぇ……」

怒りの頂点に達したエンアーは持っていた短剣をミケルに向かって振り下ろすと、ミケルは剣を手に取りエンバーの手首を一太刀で切った。

ミケルの剣が振り切る方向へとエンバーの手首が血飛沫と共に舞った。

エンバーは部屋中に鳴り響くような悲鳴を上げ、次の瞬間ミケルはあたしを片腕で抱き寄せ、あたしの首に剣を当てた。

「動くな！」

いきなりの状況にあたしは何が起こったのか理解する間もなく、傷ついた足の痛みに顔をしかめた。

「なんで……」

混乱する頭の中であたしはミケルに問いかけたが、返事は返ってこない。

「馬を用意しろ！」

急な展開で全員がどう動いたらいいのか迷っているようだ。

「馬を用意しろと言っているのが聞こえないのか！」

「用意してやれ」

「しかし……」

アシルが兵士に指示を出すが、兵士も事態の状況が読み込めず、すぐに動こうとしない。

「いいから用意しろ！」

アシルの叱責で兵士は慌てて部屋を出て行った。

「お前の目的は？」

確かめるようにアシルはミケルに問いかけた。

「目的？　そんなの決まっているよ。この国の王位だ」

「なぜ今頃……」

ミケルは冷笑した。

「今が一番いい時期だと思った、それだけだよ。それに僕は王位継承者のひとりだ。いや、違うな。元々この国の王になる為に僕は産まれてきたんだ。君さえ産まれてこなければね」

ミケルの最後の一言に、とても強い憎しみが込められているように感じられた。

馬の用意が出来たと知らせが入ると、ミケルはあたしを抱きかかえたまま部屋の扉へと向かい、あたしは痛む足を引きずるようにして歩いた。

「そいつは関係ないだろ。離してやれ！」

「城を出たとたん、矢で蜂の巣になってなりたくないからね。鈴は連れて行くよ」

ミケルは用意された馬まで行くと、あたしを馬に乗せ勢いよく走り出した。

いままでに経験した事の無い馬上での揺れに、あたしはただただミケルにしがみつくしかなかった。

第３５章

半日以上馬を走らせ続けて着いた場所は、人里離れた一軒家だった。
日はすっかり落ち、あたりは真っ暗だ。
ミケルは馬から降りると、あたしを抱きかかえるように降ろし、そのまま抱き上げた。
「お、降ろして」
あたしは慌てて降りようとした。
「その足じゃ歩けないだろ。あんまり動くと落ちる」
そう言われると大人しくしているほかない。
「ここは何処？」
「僕が旅に出るまでの2年間を過ごした場所」
家に入って部屋を見渡すと部屋が3つあるだけのこじんまりとした家だった。
あたしをそっと椅子に座らせたミケルはテーブルにあったロウソクへ火を灯し、あたしお前にひざまついた。
「傷、見せて」

ミケルはあたしの左ももに巻かれている血で真っ赤に染まった布をゆっくりと取った。

「ずいぶん思いきった事をやったもんだね。まだ少し出血している」

ミケルは家の中をなにやら探し始めると、何かが入った瓶と布を持ってきた。

「化膿しないよう消毒するね。少し痛いけど我慢して」

そう言うと瓶の中身を一度にでないよう瓶の入り口を自分の親指で押さえると、一気に傷口へと振りかけた。

「うっ！」

一気に体中に痛みが広がり、両手をギュッと握った。

ミケルのバカ！

少しって言ったのにメチャクチャ痛いじゃん！

そんなあたしの様子を気にする事無くミケルは傷口を綺麗に拭き取ると、新しい布を巻き始めた。

「傷口が塞がるまでは無理はしない方がいい」

その頃になってようやく痛みが引き始め、あたしは大きく息を吐き出した。

「なぜ？」

頭の中では聞きたい事が沢山あるのに、なぜという言葉しか出てこない。

「痕が残らないといいけど」

しかし、ミケルはあたしの質問に答えようとしない。

「ミケル！」

ミケルは別の椅子に座りジッとあたしを見つめた。

「ミケルがエンバーの仲間だったなんて……」

なによりあたしはその事実がとても悲しかった。

「それは違う。エンバーは自分の利益の為に僕を利用した。だから、僕も同じように利用した。それだけだ。もっとも、それを仲間だというのなら否定はしないけどね」

「だから……、必要がなくなったからエンバーにあんな事をしたの？」

エンバーの手首を何の戸惑いもなくミケルが切り落とした光景が、今も鮮明に脳裏に焼き付いている。

「そうだよ。彼は僕にとって必要ではなくなった。それだけのこと」

ミケルの瞳は冷たくなんの感情も映していないようで、まるで、自分の知らない人を見ているかのようだった。

あのやさしいミケルはどこへ行ってしまったのだろう。

「ミケルが王位を望めば、内乱が起きるかもしれないんだよ」

「うん、そうなるだろうね。今のこの国ではアシルが王になっていることをよく思っていない人は沢山いるしね。これだけ国が疲弊していれば当然の結果だけど」

なんでも無い事のように言ったミケルにあたしは怒りが込み上げてきた。

「多くの人が死ぬかもしれないのに、ミケルは平気なの？」

ミケルは少し黙った後、口を開いた。

「君ならどうする？　ずっと城を追われ、身を隠すように生きてく人生と、王位に即く事で身を隠す事無く堂々と生きる事が出来る人生と、どちらを選ぶ？」

まっすぐ見つめ答えを求めるミケルに、あたしは答えることが出来なかった。

ミケルは１０年もの間、身を隠すように生きてきたんだ。

その生活はきっとあたしが想像するよりもきっと、辛い生活だったに違いない。

それが王位に即く事で身を隠す必要もなく堂々と生きていけるなら、そう思うとミケルをこれ以上責める気にはなれなかった。

でも……、ミケルのやろうとしている事が必ず正しいとは思えない。もっと他に方法があるんじゃないかな……。

「なら……、僕と一緒に逃げてくれる？　僕が王位に即いていたなら、鈴と結婚するのは僕だったんだ。鈴が一緒に逃げてくれるなら、王位は諦めてもいいよ」

あたしとミケルが一緒に……。

あたしはまたもミケルの質問に答える事が出来ずに下を向いてしまった。

「さぁ、今日はもう遅い、寝よう」

ミケルはあたしの返事を聞く事無く立ち上がると、あたしを抱き上げ隣の部屋のベッドの縁へと座らせてくれた。

「お休み」

そう言うとミケルは部屋を出て行った。

第３６章

次の日、起きるとすでに日が高く昇っていた。

あたしはベッドから降りて、痛む左足を庇いながら部屋の扉を開けると、ミケルはすでに起きていたらしく、机の上になにやらよくわからない道具を広げて作業していた。

「おはよう。お腹空いただろ」

そう言うとミケルは椅子から立ち上がり台所へと向かった。

あたしが椅子に座ってしばらくすると、ミケルは野菜を煮込んだスープの入った器をあたしの前に置いた。

スープは作り立てのようで、美味しそうな湯気が立ち上り、あたしは一口口に含んだ。

温かいスープが空っぽの胃を満たすように広がっていく。

「美味しい！」

そういえば昨日は城を出てからまったく食べ物を口にしていなかったけ。

いろいろありすぎてすっかり忘れてた。

「気に入ってもらえたみたいで良かった」

まるで昨日の事なんてまったくなにも無かったかのように、うれしそうに笑いながらミケルは机の上に広げてある道具を手に取り、作業を始めた。

「これミケルが作ったの？」

「そうだよ。近くの農家から野菜を分けてもらったんだ」

昨日ここへ着いた時は日も落ちて真っ暗だったから気がつかなかったけど、近くに農家があるんだ。

「近くと言っても馬で３０分程かかるけどね」

それって近いとは言わないけど……。

でもそれって、この家がそれだけ人里離れているってことだよね。

「なにしているの？」

さっきからミケルは石で造られた道具を使って何かをすり潰している。

「薬だよ。城を出てからの2年間、一緒に暮らしていた人に薬学を学んだんた。場所によって手に入る物が違うけど、どこで暮らしても薬学は重宝されるから」

あぁ、それでミケルはラギィの実やその解毒剤について詳しかったのか。

「食べ終わったら傷見せて」

あたしは言われた通り食べ終わった後、ミケルに傷の手当をしてもらった。

傷口は塞がっていた為、消毒は昨日みたいな強烈な痛さは無かったが、今日一日は安静にしているように言われ、あたしは部屋へと戻った。

しかし、テレビがあるわけでも音楽が聴けるわけでもないこの世界では一日部屋にいると本当に退屈だ。

椅子に座り机に頬杖をしながらしばらくは窓の外を眺めていたが、窓から見える景色はのどかさを絵に描いたようで、昨日の出来事が嘘のようだ。

もしミケルが本当に王位を狙っているなら、やっぱり内戦なんてものが起きるんだろうか。

そうなったら、きっと大勢の人が傷ついたり死んだりするのかな。

そんな事を考えても平和日本で暮らしていたあたしには、まるで遠い国の出来事のようで実感がわかない。

あたしは嘆息した。

たとえ実感が湧かなくても、人が死んでいくかもしれないと思うと、これからこの国で起ころうとしている事を黙って見ているしかないのだろうか。

あたしは自分のいる部屋を見渡した。

木造で造られた古びた家。

６畳程の部屋にはベッドと机と椅子意外何も無い。

ミケルは城を追われ、２年間この家で何を考えて暮らしていたんだろう。

人目を避けるようにして生きていく為にきっと必死で薬学を学んだに違いない。

城を追われたのは自分のせいではないのに、そんな不条理な人生を送らなければならなかったミケルを思うと、王位を手に入れたい、そう思う気持ちもわからないでもない気がする。

でも、アシルだってお城で暮らしていたからって幸せだったとは言い切れない。

そりゃ王としてはまだまだかもしれないけど、後見人のエンバーがああなった以上、今度は誰にも邪魔をされずに良い国をつくっていこうって思っているはずだ。

たったふたりきりの兄弟なのに、こんな形で争うなんてなんだかとても悲しい事に思えた。

あたしは何気なく机の引き出しを引くと、Ｂ５サイズ程の一枚の紙が入っていた。

その紙を手に取ると、そこには長い髪にゆるいパーマがかかっていて、ほっそりとした面持ちのやさしい印象の女性が描かれていた。

紙がだいぶ黄ばんでいるからずいぶん前に描いたものだと思うけど……。

その時、扉がノックされあたしは慌てて机の引き出しに紙をしまうと、扉の外からミケルの声が聞こえた。

「夕飯出来たよ」

窓の外を見るとすっかり夕暮れだ。

元々起きるのが遅かったせいか、いろいろな事を考えているうちに日が暮れてしまったようだ。

あたしは急いで部屋を出ると、机の上にはすっかり夕食の用意が出来上がっていた。

「さぁ、食べよう」

あたしは椅子に座り夕食を食べ始めた。

「言ってくれたら夕食作るの手伝ったのに」

「今日一日安静にって言ったのは僕だからね。手伝わせるわけにはいかないよ。そんなことより明日は日の出とともに出発するから」

「どこに行くの？」

「明日になればわかるよ」

それ以上喋ろうとしないミケルにあたしも突っ込んで話を聞く事はしなかった。

第３７章

次の日、日の出とともにミケルはあたしを馬に乗せ、その後ろに乗って出発したが、３０分程馬を走らせ、小さな村が見えてくるとミケルは馬を止めた。

「鈴、馬はひとりで乗れる？」

「何度かルカに教えてもらったけど」

「良かった。じゃ、ここからはひとりで帰れるね」

そう言ってミケルは小さな袋をあたしに渡すと、馬から降りてしまった。

帰れるねって……、どこへ……？

「この村を通り過ぎてしばらく行くと分かれ道がある。そこを左に行くと大きな街に出るから、そこで城までの道を尋ねるといい」

「……なんで、あたしは人質として連れてきたんじゃ……」

ミケルは軽く肩をすぼめた。

「そうだよ。でもそれは城を出るまでのこと。これ以上君を巻き込みたくないからね」

「……ミケルはどうするの？」

「本当は城まで送ってあげたいところだけど、今はまだ捕まるわけにはいかないから。君は城に帰ったら1日でも早く元の世界に戻った方がいい」

それってやっぱり……。

「ね、ミケルにとって王位ってなに？」

ミケルは少し考えてから答えた。

「影……、かな」

「影……？」

どうゆう意味だろう……。

「もう行った方がいい。でないと今日中に戻れないよ」

あたしは影と答えた意味を聞こうとしたが、ミケルが馬の尻を叩いた為馬が歩き出し、それ以上ミケルと話をする事が出来なかった。

ミケルの姿が見えなくなる頃、ミケルから貰った小さな布の袋を開けると、そこに入っていたのはお金だった。

あたしの事を心配して渡してくれたんだ。

このままあたしを人質としてそばに置いておけば、ミケルにとって有利に運ぶはずなのに。

こんなお金まで渡してあたしを城に戻してくれるなんて……。

ミケルの優しさが心に染みた。

なのになぜ大勢の人が傷つき死ぬかもしれないのに、王位を欲しがるんだろう。

あたしは不思議でしかたなかった。

ミケルが言った王位とは影と答えた謎掛けのような言葉。

その言葉の意味を必死で考えたけど、結局あたしの頭では答えを見るけることができなかった。

あたしはミケルに言われた通り、途中で城までの道を聞きながら帰ったが、馬の扱いが初心者だったということもあり、城に着いたのは日が沈み辺りが真っ暗になった夜更けの頃だった。

松明が焚かれた城の門の前まで行くと、突然帰ってきたあたしを見て門番をしていた兵は驚き、慌てて城の中へと連絡に走っていった。

その為、あたしが城の中へ入ると最初にルカが迎えてくれた。

「よくご無事で」

「鈴様！」

その後に涙目になったカリナが走ってきたあたしに抱きついた。

「心配致しました」

あたしはそっとカリナの背中を撫でてやった。
そして城の一番奥からアシルがやってくるのが見えた。
「ただいま……」
「……足の方はちゃんと医者に見てもらえ」
それだけ言うとアシルは踵を返していった。
ぶっきらぼうな言い方で、以前のあたしならアシルの態度に腹を立てていたけど、今となっては不器用な優しさが伝わってくるから不思議だ。
その後、あたしはアシルが言っていたとおり、城に常駐している医者に足を診てもらった。
「最初の処置が良かったのですね。化膿もしていませんし、この様子ですと傷を残す事無く数日で完治するでしょう」
医者に言われて内心ホッとしたあたしだった。
ミケルの処置に感謝しなきゃね。
しかし、ミケルはあの後何処へ行ったんだろう。
結局あたしはミケルを止める事が出来なかった。
そのことが自分の中でとても気がかりだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7255f/

光と影のフレール

2010年10月13日11時23分発行